The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語文化の比較と交流（10）（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91550
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト2022

言語文化の比較と交流10

田　中　智　行
中　　直　一
三 浦 あ ゆ み
渡 辺 貴 規 子

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2023

ま　え　が　き

本共同研究プロジェクトは、大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻に所属する教員と、同専攻博士後期課程に在籍する大学院生をメンバーとして 2013 年度に発足した。10 年目となる 2022 年度は、教員 6 名と大学院生 1 名で研究を行った結果、4 名の論文が掲載に至った。

「言語文化の比較と交流」という名称が示すように、本プロジェクトは、専門分野を異にする研究者が大きな枠組みの中で緩やかに繋がり、それぞれのテーマを追究しながら、各自の研究の底流をなす「比較と交流」という視点から言語文化学に寄与することを目的としている。

2022 年 4 月、大阪大学は言語文化研究科と文学研究科を統合し、人文学研究科を新設した。これに伴い、言語文化専攻も人文学研究科言語文化学専攻として生まれ変わった。本書は、この新体制での最初の年度に実施された共同研究の成果を集成したものである。

本共同研究プロジェクトが、言語文化学の発展に些少なりとも貢献しうるよう、今後も長く継続されることを期待したい。

田　中　智　行
中　　直　一
中　村　綾　乃
平　山　晃　司
三　浦　あゆみ
渡　辺　貴規子
任　　天　楽

言語文化共同研究プロジェクト 2022

言語文化の比較と交流 10

目次

田中智行
『金瓶梅詞話』所引「黄氏女卷」訳注稿.....1

中直一
森鷗外訳「戰僧」について
　―翻訳底本との対比に見る鷗外訳の特質―.....10

Ayumi Miura
Reception of Latin vocabulary and introduction of new words
in *An Alphabet of Tales*.....20

渡辺貴規子
大正初期における翻訳少女小説の一様相
　―エクトール・マロ原作『家なき娘』の初の邦訳をめぐって―.....34

『金瓶梅詞話』所引「黄氏女卷」訳注稿

田中智行

はしがき

以下に『金瓶梅詞話』第七十四回において上演される「黄氏女卷」を訳出する。この宝卷には明刊の折本ものこっているというが[1]、いま見る手立てがなく、『三世修行黄氏宝卷』などの題で清代以降の刊本が残っている。広く流伝した宝卷だが、『金瓶梅詞話』中の引用は、現在知られるその最も古い形をとどめる[2]。

底本には『金瓶梅詞話』影印本（大安、1963）を用いた。ただし詞話本には誤りが多いので、白維国・卜鍵『金瓶梅詞話校註』（岳麓書社、1995）をあわせて参照し、同書の校訂に従った場合は一々注記せず、本文を正した上で訳出した。そのほか、梅節『金瓶梅詞話校注』（北京図書館出版社、2004）やデイヴィッド・ロイによる『金瓶梅』英訳（David Tod Roy tr., *The Plum in the Golden Vase, or Chin P'ing Mei*. 5 volumes. Princeton: Princeton University Press, 1993-2013）により本文を改めた箇所については、適宜注釈に記した。

この訳注稿は訳者が現在進行中の『金瓶梅』翻訳[3]の一部をなすものであり、小説の翻訳全体の原則として、斉言句は日本語でも文字数を揃えている。原作の風格がよりよく保たれるようにとの工夫ではあるが、これにより韻文などが厳密な逐語訳になっていない場合もある。大方のご叱正を乞いたい。

訳注稿

聞くならく、法はそもそも滅びぬものゆえ、入滅せしは空（くう）に帰するため[4]。道はもともと生じることなく、生起して用をなすものに非ず。法身（ほっしん）[5]によって八相（はっそう）[6]を示し、八相によって法身を顕（あらわ）す。煌々（こうこう）たる智慧（ちえ）の灯火（ともしび）は、この世の扉を開け放ち、あかるく輝く仏の鏡は、暗い道をも照らし出す。百年の光景は刹那（せつな）のうちに、四大（しだい）[7]の幻身は泡影（ほうえい）もおなじ。まいにち世事（せじ）にあくせくし、つねに悪業に追い立てられ[8]、性（せい）を円（まど）かにできる由（よし）もなく、六根（ろっこん）[9]に貪欲をはびこらせる。功名の世を蓋（おお）ったとて、長大な夢にほかならず、富貴の人を驚かすとも、無常の二字は免れえぬ。風火（ふうか）の散りゆくに老少の隔（へだ）てなく、山河の磨（す）りへれば英雄は影もなし[10]。我、十方に偈を伝えて、八部（はちぶ）[11]を壇（だん）に集

---

[1] 車錫倫『中国宝卷総録』（北京燕山出版社、2000）は「仏説黄氏女看経宝卷」の項に李世瑜氏旧蔵本を著録する。

[2] 澤田瑞穂「『金瓶梅詞話』所引の宝卷について」（『増補　宝卷の研究』国書刊行会、一九七五）を参照。

[3] 『新訳金瓶梅』鳥影社。上卷（2018）、中卷（2021）は既刊。

[4] 底本「故帰空」。李開先『宝剣記』第四十一齣は同じ箇所を引いて「故帰滅以帰空」に作る。ただし更に遡ると唐・張鷟（ちょうさく）の文に出典があり、そこでは「故現滅以帰空」となっている（「大雲寺僧曇暢奏、率僧尼銭、造大像高千尺、助国為福。諸州僧尼訴云、像無大小、惟在至誠。聚斂貧僧、人多嗟怨、既違仏教、請為処分」『全唐文』卷一七二）。

[5] 仏の三身の一つ。真理そのものとしての仏。

[6] 釈迦八相。釈迦がこの世で現した、降兜率（ごうとそつ）から入滅までの八種の相。

[7] 地水火風。万物を構成する四元素。

[8] 底本「終朝業試忙忙」。「業試」は『宝剣記』では「孽識」に作る（脚注 12 を参照）。

[9] 眼、耳、鼻、舌、身、意の六つの感覚器官または機能をいう。

[10] 「百年の」からここまでは宋・宗鏡禅師『銷釈金剛科儀』卷一に基づく。

[11] 八部衆。天、龍、夜叉、乾闥婆（けんだつば）ら、仏法を守護する仏の八眷属。この二句は唐・劉禹錫（りゅううしゃく）の「深法師の南岳に遊ぶを送る（送深法師遊南岳）」詩に基づく。

めん。火宅の苦しみを救い、空門の鍵をひらかん。偈にいわく――

富貴貧窮はそれぞれ故あり
縁にて定まれば求むる勿れ
春に種まくこともせざるに
荒れ田で豊作ねがうも空し[12]

菩薩さまがた[13]、貧僧が仏法を説きあかすをお聞きくださるとあらば、この四句の偈こそは、古のお祖師さまが遺されたもの。「富貴貧窮はそれぞれ故あり」とはなぜかというに、いまここにいらっしゃる菩薩さまがたが、お役人さまに嫁がれて、官位は高くその禄厚く、奥深いお屋敷に住まれ、下男や下女を使われて、頭に金を挿し銀を冠り、綾錦の巣のなかで育ち、晴着の山のなかに生れ、着るものが欲しけりゃ綾錦を千箱、食べものが欲しけりゃ馳走が百味、栄華を享け、富貴を受け――という具合なのはすべて、前世の謂れのなせるわざ。根本に一大因縁のあればこそ、求めずして得られるという次第。貧僧がここで看経念仏し、さらにおいしいお茶やご飯、善心からのお布施を頂戴できるのも、たいへんなご縁にて尋常ではなく、みなこれ龍華会[14]につどう者どうし、いずれも前世で修めた功徳のお陰。もしも修めていなければ、春に種まきせぬようなもので、みのりの秋になったとて、一面の荒れた田畑に、実の熟しようはずもなし。まさしく――

霊台を掃ききよめてしっかりと励み
心満たされ嬉しくとも気を緩めるな
五濁[15]と六根とを努めてきれいに洗い
法門を究めて仏祖の家風を知るべし

また――

百年の光陰はまばたきのうちに過ぎ
この身はいつか灰と舞い散るさだめ
生きて悟りを得んとする者あらんか
生じぬ悟りの境地へと身を退く者は

また――

人の命は息するあいだの無常のもの
目に映るは西山に堕ちゆく赤い夕日
宝の山を巡り尽してむなしくかえり
一度人の身を失えば永劫も復し難し[16]

富貴や栄華というのは、思えば湯を雪にかけたようなもの。よく考えたならば、どちらも取る

---

[12] 北宋の道士・徐守信による無題の詩三首（其二）に基づく。宝巻の冒頭からここまでは明・李開先『宝剣記』第四十一齣（林冲の母の葬儀を描く）でも引用されている。
[13] 聴衆に呼び掛ける。
[14] 弥勒菩薩が世に出たとき、龍華樹の下で衆生済度のためにひらく法会。
[15] 現世に満ちている五種の汚濁。
[16] 以上三首のうちの第二首と第三首は、『銷釈金剛科儀』巻三にそれぞれ見える他、『宝剣記』第四十一齣にも逆順で引かれている。

に足らぬ、人を驚かせる夢幻にすぎない。いまは人の身を得たれども、心のうちでは悩み苦しみ、死ねば四大は塵となり、魂のいずこへ赴き苦難を受けるかも知れず。生死輪廻をおそれるならば、いま一歩を踏みだすべし。

（歌）
〔一封書〕

生と死は向かい合わせ
浮世を嘆いていつも齷齪
男や女が堂満たしても
無常の訪れ受けるは自分
人生は春の夢のように短く
運命は風の灯のごとく儚し[17]
思うだに
悲しきを
口に出せば腸もちぎれんほど[18]

巻頭にいわく、化身を顕しとこしえに苦難を救う仏には、そもそも行くとか来るということがない。教主たる弥陀（阿弥陀）の普済の願いは広く深大にて、四十八願を立てて衆生を救い、各人にその本性を悟らしめんとする。弥陀はいま、心きよらに苦海の渡しをつかさどり、苦海の高波かきわけて、菩提の妙果を証させんとする。これを念じる者は恒河沙ほどの罪も滅ぼし、これを称える者は無量の福を増し、書写読誦する者は華蔵世界に生まれ変わり、目にし耳にして心にとどめる者は臨終のとき定めて西方浄土へと赴くべし。およそ念仏する者には必ず無量の功徳あり。慈悲をたまわりたるがゆえ、慈悲をたまわりたるがゆえ、大慈悲をたまわりたるがゆえ。一切の仏法僧に帰依し、とこしえなる三宝を信じ敬わん。法輪のつねに転じて衆生を度さんことを[19]。偈にいわく――

この上なく深き妙なる法には
百千万劫経ても出会いがたし
いま耳にしたなら心に刻んで
如来の実の教えをば了解せん[20]

黄氏の宝巻をはじめて開けば
諸仏に菩薩らは降臨したもう
炉の香は虚空あまねく満ちて
仏の名号は九天をも揺るがす

むかし漢王の御代のこと、順調なる風と雨、安泰なる国と民との感ぜしめるところ、ひとりの善心の奥方が世に出ることとなった。曹州南華県（いま山東省）の黄員外の娘は、おごそかにも美しい容色であったが、わずか七歳にして精進のみを口にするようになった。金剛経を念じて父母の大恩に報いることを毎日かかさなかったので、これに感じた観世音菩薩が中空に顕現した。父母は娘が一日じゅう経を念じているのをみて、どうにかやめさせようとしたが従わなかった。

---

[17] ほぼ同じ二句が『銷釈金剛科儀』巻八に見える。
[18] この〔一封書〕の曲も『宝剣記』第四十一齣に引かれている。
[19] 「慈悲を」以下、『銷釈金剛科儀』巻一に基づく。
[20] 同じ偈が『金瓶梅詞話』第五十一回の『金剛科儀』上演にも見える。

ある日、両親は口利きをたのんで、めでたい日柄と時刻をえらび、娘を嫁がせた。嫁いだ男は姓を趙、名を方といい、屠畜をなりわいとしていた。夫婦として十二年のあいだに、一男二女をもうけた。ある日、黄氏は夫に告げた。

「あなたとは夫婦になって十二年、坊やも娘も生んだけど、恩愛にとらわれたままならば、永久の苦しみに沈みます。こんな小唄がありますよ、亭主どのどうかお聞きあれ」

その歌詞にいわく――

宿縁で夫婦むすばれて
息子も娘もあるけれど
無常に敵うはずもなし
旦那様伏して願います
同じ決心してください
ともに修行し
寿命を終えん
富やら貴やら
お払い箱にし
名と利貪ることやめて
分相応に過しましょう

夫の趙は、この歌詞にしたがうことはできぬと、ある日、別れを告げて出立し、山東へ豚を買いにいった。黄氏は夫が行ってしまったのを見ると、清らな部屋で休んでは、沐浴をして焼香し、金剛経を奉誦して過ごした。

令方いまや山東へと去り
四人の子女は中の広間に
黄氏は、西の部屋で、香り湯を浴み
着替え、簪珥はずし、質素な身なり
日ごと、西に向かい、焼香礼拝して
念珠と[21]、宝巻を目に、金剛経を誦む
看経も、終わらぬに、香煙は散って
念仏の、声は朗々と、蒼穹つらぬく
地獄門、天国にまで、光はあふれて
閻魔は、ひと目みて、龍顔を綻ばす
「もしや、生者の世に、仏祖が出たか」
大急ぎ、判官二人に、委細調べさす
判官が、大王さまへ、お察しあれと
「曹州府、南華県なる、善良の者あり
経文を、誦むは黄氏、食は精進のみ
心善く、徳行すぐれ、天国を驚かす」

（歌）
〔金字経[22]〕
閻魔王これを聞いて内心あわて

[21] 底本「面念顔」。読めないので、ロイの英訳を参考に「顔」を「珠」の誤りとみなした。
[22] 底本「金剛経」に誤る。

いそぎ遣わしたるは無常の鬼のふたり組
ふたり趙家荘へと急行すれば
黄氏はまさに看経の真っ最中
目の前にいきなり仙童あらわれて

（誦読）
「善人は童子が迎えにあがります
悪人は夜叉が連れにまいります」
経を読んでいた黄氏はあわてて
「どこの童子さんが迎えにきたの」
仙童が奥方にこたえて言うには
「心がけ善き奥方お焦りなきよう
この世の親類の使いにはあらず
あの世からきた童（わらべ）でございます
あなたがお経を読んでいるゆえ
閻王（えんおう）は心がけ善き奥方をご招待」
言われて黄氏は心穏やかならず
凡心より無常の鬼に繰（く）り言（ごと）して
「同姓同名の人を引っぱってって
どうして私がしょっ引（び）かれるの
千遍万遍死んだとてかまわぬが
息子に娘二人置いていけますか
上の娘の嬌姑（きょうこ）もまだやっと九歳
六歳の伴嬌（はんきょう）も母なしでは済まぬ
かわいい息子の長寿は年（とし）三歳で
いつも懐（ふところ）に抱き忘れようもなし
この一命を見逃してくれたなら
其方（そなた）のため沢山（たくさん）功徳積みまする」
仙童が奥方に答えて言ったには
「あなたほど金剛経誦（よ）む者はなし」

善悪二童子[23]は、黄氏に泣きつかれた。どうしても冥土へは行きたくない、三人の子どもがかわいくて、捨てていくなどできません――。仙童はせきたてて言うよう、
「心がけ善き奥方よ、“あの世で三更にお呼びなら、おまけで四更に変えられぬ”と申します。娑婆で期限が延ばせるのとは、わけが違うのです。冥府があなたを呼ぶのに、もし刻限をたがえれば、私が罪を得るのです。寿命が長いの短いのと、軽々しくは言わぬことです」

黄氏はこのとき考えをめぐらし
下女を呼び湯を沸かしにいかせ
香り湯で沐浴をし終えるや否や
すぐさま我が身を仏堂へと運び
脚を組んで座り一言も口にせず
一霊の真性は閻王に見（まみ）えんとす

（歌）

[23] 人の善事悪事を記録する二人の童子。

〔楚江秋〕
人生は夢のごと
光陰は常ならず
危うきに臨めば誰もみな風前の灯
すぐさま歩(ほ)を返し閻王のもとへ
急拵(きゅうごしら)えの旅装束にて
望郷台[24]から家郷(かきょう)眺めれば
息子も娘も泣きの涙にて
鈸(シンバル)と太鼓にて斎場を設け
喪の出で立ちにてお弔(とむら)い

（語り）
令方が悲しんだことはさておき
黄氏の霊の冥土への道行(みちゆき)述べん
見る間に奈河(なか)の岸へ着いたれば（奈河は地獄の川）

ひと筋の金の橋が彼岸へと導く
「この橋は何(なん)の為(ため)あるのでしょう」
「看経し念仏する者のみ渡れます」
奈河の両岸には血の波が流れて
河の中に沈むは無数の罪ある魂
悲しみわめき泣いて騒がしきに
筋浮(がりがりの)く亡者を四方より毒蛇咬(か)む
進むうち至りし山の名は破銭山(はせんさん)
黄氏進み出てその由来を問えば
「浮世の人らが紙銭を燃やすとき
焚きあげきらぬのを捨てるゆえ
欠片(かけら)がたくさん舞いただよって
積み重なったが破銭山のいわれ」
さらに通りかかったのは枉死城(おうし)
転生できず彷徨(さまよ)うは無数の孤魂(ここん)
黄氏はこれ見て心に慈悲おこし
口を開き直(ただ)ちに唱えたは金剛経
奈河なる罪人らみな眼をあけて
刀山(とうざん)も剣樹(けんじゅ)も月宮の林へと変じ[25]
茹釜(ゆでがま)にも火の池にも蓮華が現(あらわ)れ
無間地獄には瑞雲が立ち籠(こ)める
そこで仙童はあせり落ち着かず
いそぎ閻君のもとへ走りご注進

（歌）
〔山坡羊〕

---

[24] 原文「郷台」。死後の魂が現世の我が家をあの世から眺めるための台。
[25] 底本「尸山爐剔樹騫林」。梅節『金瓶梅詞話校読記』が「刀山剣樹成騫林」と改めるのに従った。

黄氏が森羅の宝殿に着けば
童子がまずはご奏上
「看経の者をお連れしました」
閻魔王の伝令で召し出され
黄氏は金の階の下より拝礼し
やむなく面前にひざまずく
閻君からのご下問あって
「いつから金剛経を誦みはじめたか
感じ入った観世音の
顕現したるは何年何月何日」
黄氏は合掌し事情を訴えて
「七つの時よりなまぐさを断ち
仏さまを供養してございます
大王さまどうかお聞き届けを
夫に嫁いでからとても
看経する気持は衰えず」

（語り）
閻君はそこでいそぎ伝達させて
「心がけ善き奥方よ篤と聞かれよ
金剛経には都合幾つの字ありや
どれ程の点と画とが絡み合うや
どういう文字から始まりたるか
真ん中にあるのはどの二文字か
もし経を念じて間違いなければ
魂を娑婆へと返して遣わそうぞ」
黄氏はすぐ階の下で立ちあがり
「大王さま金剛経をばお聞きあれ
字数は五千と四十九ございます
点と画の数なら八万と四千にて
如の字に始まり行の字で終わる
真ん中にあるのは荷担の二文字」
黄氏が経を語り終わらぬうちに
閻王の宮殿の前に光はあふれて
手を挙げ龍顔にはまことの喜色
「魂を娑婆へと返して遣わそうぞ」
黄氏はこれを聞くと慌てて頼む
「大王さま枉げて叶えて下さいな
一つには屠畜の家に遣らないで
二つには染物の商いもご勘弁を
善行積む家の子にしてください
看経念仏して過ごしたいのです」
閻魔王は筆を取り即座に断下し
「曹州の張家の子に転生させよう
あの家は積上げた財産多かれど
墓前に参る孝子だけ欠いている
員外は夫妻ともども善を修めて

その名は四海に鳴り渡っている」
迷魂湯[26]を一杯飲み終えたとたん
張家の奥方はお腹に子を身籠り
十月満ち足り生まれた一子には
左の肋の上に赤く二行記されて
「この子こそは看経せし黄氏の娘
観水の趙令方にかつて嫁ぎし者
経を誦めば善報多くあるがゆえ
男子となって寿命長きを得たり」
張員外は自らそれをたしかめて
宝物のごと可愛がり喜色浮べる

（歌）
〔皂羅袍〕
黄氏は張家に生まれ変わって
男の身もぴったりよく似合う
員外はこれを見て喜び弥増し
三年のうちには人らしく育ち
わずか七歳にして聡明利発
勉強して字を習い
俊達と名づけられ
十八歳にて科挙で進士に

さて張俊達は、十八で科挙に合格し、曹州南華県にて知県に任じられた。ふと思い出したのは、これが自身の故地であること。役所で着任すませると、まずは年貢のぐあいを調べ、それから庁堂で審理する。使いの者をふたり出し、すぐ趙令方を呼びにやって、「話がある」と伝えさせた。使いのふたりはおろそかにもせず、すぐさま趙家へ令方を呼びにやってきた。

（語り）
趙令方、家にあって、看経念仏中に、
二使者、挨拶する故、用事を訊ねる
すぐに、身なり整え、県の役所へと
庁堂で、いそぎ低頭、名乗り出れば
張知県、立って辞儀、椅子を勧める
挨拶し、主客に分れ、茶が運ばれる
「其許は、我が夫なり、名前は趙令方
我こそ、かつての妻、黄氏そのひと
疑わば、場所うつし、服脱ぎ見せん
左肋に、朱砂の文字、いわれを記す
長女の、嬌姑は既に、人にかたづき
二女の、伴ちゃんも、曹真に縁づく
長寿が、気掛りです、墓看てくれて
二人で、馬に乗って、いざ墓参せん」

[26] 亡魂が転生するに際し、前世のことを忘れさせるため飲ませる薬湯。

知県は令方や子どもらと五人、黄氏の墓まで行って棺を開けてみれば、遺体の顔はそのままだった。もどると七日間の法要を営み、令方が金剛経を読むと、瑞雪の降りしきるなか、男女五人揃って、祥雲に乗り天へと昇ったのだった。その証拠となる〔臨江仙〕の一首があって――

黄氏は経を読み正果を成し
同じ日に極楽をめがけ
家族五人みな天に昇る
善人は観音を語り伝えよ
菩薩よ来たりて我を済度したまえ[27]

宝巻すでに宣べ終わり、仏聖すでに知ろしめす。法界は有情なれば、ともに転生して極楽に集わん。南無一乗宗、無量義、真空と妙有を説く金剛般若経[28]。遥かなる諸仏の大会につぶさに聞こえ、恒河の沙のごとき衆生みな浄土へ導くべし。伏して願うらくは看経念仏の声の、上は天堂、下は地府へと届き、仏を念じるものは苦海を離れ、悪を作せるものは永久の苦しみに沈まんことを。悟りを得しものを諸仏がみちびき、その放つ光明が十方を照らさんことを。東より西より照り返されて、南へと北へと家郷を訪ねられることを。不生不滅のさすらい舟が彼岸に到り、子どもらが実の母に会え、母の胎に入って三災[29]（水火風）をおそれず、八十劫も永遠に安らかならんことを[30]。

偈にいわく――

衆生の造りし悪業のかずかず
太古にはじまり現在にいたる
霊山より離散して真性迷うに
一点の霊光は生類を遍く照す

一には報いん天地載するの恩
二には報いん日月照らすの恩
三には報いん皇王の国土の恩
四には報いん父母の養育の恩
五には報いん祖師の伝法の恩
六には十類の孤魂[31]らに報い早の転生祈らん
摩訶般若波羅蜜

（本稿は科学研究費補助金（23K00335）による成果の一部である）

[27] 底本「菩薩未度我」。未は来の誤りと見なした。
[28] 底本「南無一乗字真空」（字は宗の誤り）。『銷釈金剛科儀』巻九に従い、後ろに「妙有金剛般若経」の七字を補った。
[29] 底本「三実」に誤る。
[30] 底本「八十部永返安康」。「八十劫永遠安康」の誤りと見なした。
[31] 陣没、餓死、客死など十種類の非業の死をとげた孤魂。

森鷗外訳「戰僧」について
―翻訳底本との対比に見る鷗外訳の特質―

中　直一

１　はじめに

森鷗外訳の「戰僧」は、アルフォンス・ドーデの「反徒の首領」(*Le Cabecilla*)[1]を、独訳版 *Der Feldprediger* から重訳したものである。鷗外訳は、はじめ 1889（明治 22）年、雑誌『少年園』第 10 号に発表され、その後 1891（明治 24）年、『柵草紙』第 21 号に再掲され（ただし一部異同がある）、さらに 1892（明治 25）年に『水沫集』に収められた。岩波版『鷗外全集』に収載されている「戰僧」は、『改訂水沫集』を底本としている。

筆者は以前、雑誌『少年園』がどのような読者層を念頭に置いて編集されていたものであるかを調査し、あわせて同誌に掲載された鷗外訳「新世界の浦島」[2]および「戰僧」について、『少年園』掲載版と岩波版『鷗外全集』の表記の異同（おもにルビの使用法）を調査したことがある[3]。ただし当該拙論においては、鷗外の訳文と翻訳底本の調査は中心的課題ではなかったため、鷗外訳「戰僧」については、翻訳底本と乖離がある旨を指摘するのみにとどまっていた。

本論文では、上掲拙論において分析することが出来なかった、翻訳底本と鷗外訳の異同を明らかにしつつ、鷗外訳の特質を解明したい。その際、鷗外訳の翻訳底本として、東京大学総合図書館の鷗外文庫所蔵本 Daudet, Alphonse, *Der Feldprediger*. In: A. Daudet, *Aus dem Leben*. Deutsch von Dr. Adolf Gerstmann. 2. Aufl. Dresden & Leipzig, Verlag von Heinrich Minden. 1886 の複写を使用し、本論文中では略号として〔底本〕というカッコ付きの語を使用する。翻訳底本のドイツ語文については、参考までに筆者による訳文・訳語を示したが、その際〔私訳〕というカッコ付きの語でそれを示した。鷗外訳は『鷗外全集』第 1 巻（岩波書店、1971 年）所収の「戰僧」を使用テキストとし、〔鷗外訳・全集版〕というカッコ付きの語を使用する。

本論文においては、底本ドイツ語と『鷗外全集』収載の「戰僧」を対比するが、必要に応じて、『少年園』、『柵草紙』、『水沫集』も参照した。『少年園』を参照する際には、『復刻版少年園』（不二出版、1988 年）を使用し、略号として〔鷗外訳・少年園版〕を使用する。『柵草紙』を参照する際には、大阪大学所蔵雑誌の複写を使用し、略号として〔鷗外訳・柵草紙版〕を使用する。『水沫集』を参照する際には、国立国会図書館デジタルコレクションからダウンロードした PDF 版を使用し、略号として〔鷗外訳・水沫集版〕を使用する。

ドイツ語底本および鷗外訳の引用については、それぞれ引用文の後に掲載ページをカッコに入れて示す。引用文中の点線アンダーラインは、筆者が便宜的に付したもので、鷗外の訳文と翻訳底本に相違が見られる部分を示している。鷗外の訳文を引用する際には、筆者の PC 環境の許す限り旧漢字・旧仮名を使用した。

上記のように鷗外はドーデのフランス語原文を直接読んで「戰僧」を翻訳したのではなく、その独訳版から日本語に重訳した。本論文の関心事は、ドーデの原作を鷗外がどう味読したかを知ることにあるのではなく、あくまでも「鷗外訳の特質」を知ることにある。従って、鷗外の翻訳底本である上記独訳版と鷗外訳「戰僧」を対比して論を進め、フランス語原文との対比は本論文の課題としない次第である。

---

[1] ドーデの原作については、富田仁「鷗外とドーデ――『戰僧』、『盲帝の曲』をめぐって――」（長谷川泉編『比較文学研究　森鷗外』〔朝日出版社、1978 年〕所収）p. 125 を参照。同書によれば、「反徒の首領」は『研究と風景画』(*Études et paysages*)に収められ、原題の *Le Cabecilla* はスペイン語の由である。ただし本文はフランス語で書かれている。

[2] 『水沫集』に収められた際に「新浦島」と改題された。

[3] 拙論「雑誌『少年園』と森鷗外の翻訳」（大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2019　言語文化の比較と交流』第 6 号〔2020 年〕所収）。

２　「戰僧」の訳文の特質――その概観

戰僧」は極めて短い小説で、岩波版『鷗外全集』で 5 ページを占める程度である。小説の舞台はスペインで、王党派と共和派が戦闘を繰り広げる中、王党派の捕虜となった共和派の兵士たちが、王党派の従軍僧（戰僧）の説得（というより脅迫）によって王党派に寝返るが、兵士たちの中で、ただ一人少年の兵士のみが説得に応じず、寝返ることよりむしろ殺される道を選ぶ、という話である。

この短い小説を、鷗外はどう訳したか。あらかじめ結論を述べるならば、今日の「翻訳」の在り方からはかなり外れ、底本原文にない文言を訳文の中に創作的に付加したり、逆に底本にある文言の訳出を省略し、あるいは要約的に訳す等々と、かなり自在な訳になっている。以下本論文では、その翻訳ぶりを分析するのだが、まず本節では、鷗外の翻訳ぶりが複雑にあらわれた――すなわち、創作的付加や省略、要約的翻訳が一文にあらわれた――例を検討する。

〔底本〕In tiefem Schweigen hatten sich die Soldaten des Prätendenten Carlos rings im Kreise gruppirt, die Flinte hing hinten am Bandelier um die Schulter und das eine Knie ruhte auf dem am Boden liegenden weißen Barett. (S.89f.)

〔私訳〕全く無言のまま、簒奪者カルロスの兵士たちは、輪になって集まっていた。銃を肩のたすきの後ろに掛け、床に敷かれた白い帽子の上に片膝をついていた。

〔鷗外訳・全集版〕机の周圍には革の襷にて銃を背に負ひたる許多の士卒、前に白き戎帽を置きてその上に右の片膝付き、祈誓に餘念なく見ゆ（p.159）

この一文に、初期鷗外の翻訳ぶりが典型的に示されている。省略、創作的付加、要約的翻訳の三つが全て見られるのである。

まず省略であるが、底本の In tiefem Schweigen（「全く無言のまま」の意味で直訳すると「深い沈黙の中で」）の部分が訳されていない。

他方、鷗外訳の「祈誓に餘念なく見ゆ」は、底本にない描写で、鷗外が創作的に付加したものである。底本では、兵士たち（「簒奪者カルロスの兵士たち」とは王党派の兵士を指す）が片膝をついていたことのみが書かれている。欧米の読者であれば、この描写のみで祈祷の場面であることが分かるが、そのようなキリスト教的な文化環境にない日本の読者に向けて、鷗外は説明的な文章を訳文の中に加えたものと思われる。これは創作的付加であり、かつ注釈的な意味合いも持つ。

第三に指摘すべきは、底本原文の構文のままに訳さずに、適宜新たな構成の日本文を創出するという、要約的な訳しぶりが見られることである。上記底本のドイツ語文の構文を見ると、三つの部分から成り立っている。すなわち、「主語＋動詞」の組み合わせによる文章三つで構成された一文になっている。具体的に言えば、(1) die Soldaten hatten sich gruppirt（兵士たちは集まっていた）、(2) die Flinte hing（銃を……掛けていた――直訳すれば、「銃が……かかっていた」）、そして(3) das eine Knie ruhte（片膝を……ついていた――直訳すれば、「片膝は……置かれていた」）[4]の三つである。ところが鷗外は原文の第二文を、まるで関係文であるかのように、「兵士」を修飾する文章として訳している。つまり、「原文の主語を訳文でも主語として訳す、原文の動詞を訳文でも動詞として訳す」という翻訳方法とは異なる翻訳姿勢を見せているのである。

上記の例は、「戰僧」における鷗外の翻訳流儀が、数行の内に凝縮してあらわれた典型例であるが、以下本論文では、創作的付加（および注釈的付加）や省略、要約的翻訳がどのようにあらわれているのか、具体例を数例ずつ集めて分析を行う。

３　創作的付加と注釈的付加

先に述べたように、鷗外の訳文の中には、底本原文にない文言が付加される場合があった。

[4] „das eine Knie“（片膝）を、鷗外は「右の片膝」を訳している。これは注釈的付加であろう。

それには幾つかのパターンがある。まず指摘すべきは、訳注に相当する解説を訳文の中に織り込むケースである。次の例では、西洋の文物についての訳注的文言が、訳文本文の中に組み入れられている。

〔底本〕Zwei halb zerbrochene Alcarazas (S.89)

〔私訳〕半ば壊れたアルカラサ二つ

〔鷗外訳・全集版〕彼の西斑牙にて、「アルカラサ」と稱へたる陶瓶の半ば壊れたるにぞありける（p.159）

私訳で示したように、底本にはアルカラサなるものが登場する。しかし、これが一体どのような物であるのか、現代読者でもにわかには分からない。鷗外は、アルカラサを知らぬであろう明治の読者のために、注釈的説明を、訳文本文の中に織り込んだものと理解出来る。

物品についての注釈的付加の他に、鷗外は物語の状況を読者が容易に理解し得るような説明も、訳文の中にさりげなく付加している。

〔底本〕die Gefangenen (S.89)

〔私訳〕俘虜

〔鷗外訳・全集版〕新に獲たる俘虜（p.159）

ドイツ語文では、単に俘虜としか示されていないが、鷗外は王党派の陣地へと引き連れられて来た共和派の兵士について「新に獲たる」と、修飾語句を創作的に付加し、状況を邦訳読者に対し、より明確に把握させようとしている。

上記の例とは少し異なり、鷗外が注釈者としてではなく、むしろ創作者として訳文の中に底本にない語句を盛り込んだ例も見られる。

〔底本〕Die armen Teufel!　(S.94)

〔私訳〕哀れな連中よ！

〔鷗外訳・全集版〕果なきは人の心なり、五尺の肉身に制馭せられて、誓を忘れ義に背くは何事ぞ。（p.161）

場面は、王党派の捕虜となった共和派の兵士たちが、戦僧からの威圧的説得に応じて、共和派から王党派に寝返り、「国王万歳」と叫んだ、その後のシーンである。ここで作者ドーデは、寝返った兵士たちのことを「哀れな連中よ」と、自作の中に作者自らの所感を書き込んでいる。これは、この物語の一つの伏線になっていて、多くの兵士が帰順する中で、一人の少年兵士だけが帰順を潔しとせず、最後に非業の死を遂げる、という結末との対照を示している。すなわち、寝返りを良しとしない少年兵士の矜持と、死を恐れるあまり敵軍に寝返る多くの兵士たちを対比させる役割を、作者はこの「哀れな連中よ！」という一句に込めたものであると思われる。訳者鷗外も、物語のこのような対照性を十分に認識し、かつ原作者以上に、寝返った兵士たちに対する批判的所感を強調している。鷗外の「果なきは人の心なり、五尺の肉身に制馭せられて、誓を忘れ義に背くは何事ぞ」という訳文は、底本の意訳というレヴェルを越えて、もはや創作的付加と言い得る文章になっていると判断し得る。

鷗外訳にはさらに、全く翻訳底本から離れて、鷗外自身の所感を訳文の中に書き込み、後にそれを削除したケースが見られる。そのことは、初出である『少年園』版と、その後の再録版である『柵草紙』版、および全集版を対比してみればわかる。（以下の引用における点線アンダーライン以外のアンダーラインおよび二重アンダーラインは、元から付されているものである。）

〔底本〕... gewahrte man die Uniform, unter dem zerknitterten Chorhemd erblickte man den Kolben einer Pistole und den Griff eines katalonischen Messers. (S.91)

〔私訳〕軍服が見えたが、皺だらけの合唱着の下には、ピストルの床尾とカタロニア刀の柄が見えた。

〔鷗外訳・少年園版〕……着古(きふる)びて皺多き僧衣の下より、軍服のほの見ゆる――否、佩(お)びたるカタロンニヤ刀の柄(つか)と短銃の把(え)[5]との、其間(ひま)より露はるゝは、山陽外史が襟呿甲覩

[5] 「把」に振られたルビは「は」とも、「え」の変体仮名とも読める。一応「え」と読んでおく。右図参照。

といひし様にも似たらんかし。（『少年園』第 10 号 p.14）

〔鷗外訳・柵草紙版〕……着古びて皺多き僧衣の下よりは、軍服ほの見え、佩びたるカタロンニヤ刀の柄と短銃の把と其間より露れたり。（『柵草紙』第 21 号 p.26）

〔鷗外訳・全集版〕……着古びて皺多き僧衣の下よりは、軍服ほの見え、佩びたるカタルニヤ刀の柄と短銃の把と其間より露れたり。（p.160）

戦僧が衣の下に刀と短銃を忍ばせているという描写の部分であるが、『少年園』と後の版との異同については、全集版の「後記」にも、異同の存在する旨が記されている。西洋の文学作品の翻訳の中に頼山陽の『日本外史』への言及があるのは、一見して創作的付加であることが分かる。推測にすぎないが、鷗外は『少年園』に「戰僧」を掲載するにあたり、少年読者への、一種の教育的見地から、外国文学を味読する際にも日本の思想家に類比の言葉があることを常に想起するようにとの思いがあったのかも知れない。とはいえ、『少年園』から『柵草紙』に再録するに際しては、こうした教育者的見地からの創作的付加を訳文の中に織り込むよりは、むしろ西洋文学作品の中に頼山陽という名前が登場するという異質性を除去する方が好ましいと判断したものと考えられる。

なお頼山陽の「襟呿甲覩」という言葉については、現時点で調査が行き届いていない。辞書を単純に引く限り、「襟」は「えり」、「呿」は「ひらく」、「甲」は「かぶと」ないし「よろい」、そして「覩」は「みる」となり、全体として「襟を開けば鎧が見える」、ということになる。所謂「衣の下の鎧」に近い表現なのかも知れない。ただし、頼山陽がどのような文脈においてどのような意味で使用したのかは、上述のように調査が行き届かず、この点については読者諸賢のご教示を乞う次第である[6]。

以上、本節で見てきたように、鷗外には底本にない創作的な付加が存在したが、同じく創作的ではあるものの、「付加」でなく、「訳語の創作的変更」とも称すべき例も見られる。

〔底本〕So trat der Priester denn einen Schritt zurück, erhob das Gewehr, legte auf sein Beichtkind an und schoß es nieder, daß es lautlos zu Boden sank. (S.98)

〔私訳〕そこで僧は一歩後ろに下がり、銃を取り出して告解者にあてがい、発射したので、告解者は声もなく地に倒れた。

〔鷗外訳・全集版〕戰僧は一足下るよと見えしが、銃聲一轟、此少年の義士は烟の下に僵れたり。（p.163）

小説の最後の部分、戦僧が少年兵士を短銃で撃つ場面である。ここで鷗外は、死を前にして罪を告白する者（告解者）を意味する Beichtkind という語を「少年の義士」と訳している。キリスト教の文脈に通じぬ日本人読者を念頭に、鷗外が「告解者」ないしそれに類する訳語の使用を避けた、ということは理解し得るが、それに代わる訳語として、「少年の義士」を充てるのは、意訳の次元を超えて、創作的営為に近いと評し得るのではないか。鷗外は、物語の最後の部分において、自己の信念を貫くために死を選択した少年を「義士」の一語で顕彰しようとしたものと解される。これが、翻訳家としての営みなのか、一個の作家としての営みなのかは、評価の分かれる所であろう。

４　省略

翻訳底本に存在する文言を鷗外が訳出しなかったケースについては、省略の理由が説明し得る場合もあれば、説明が困難な場合もある。また、省略によって、登場人物の造形が、底本から微妙に乖離した場合も存在する。

最初に検討するのは、数行の中に、省略が複数存在し、かつ省略の説明がつくものとつかないものが混在しているケースである。

〔底本〕So wahr, als heute das heilige Osterfest ist, verspreche ich euch, daß ich denjenigen, welche jetzt rufen: „Es lebe der König!“ das Leben schenke und daß ich sie unter unsere

[6] 前掲『鷗外全集』第1巻「後記」(p.646)には、初出『少年園』版に後の版とは異なる記載がある旨が記されている。しかし残念ながら「襟呿甲覩」の意味や出典についての言及はない。

Truppen aufnehmen will, sie sollten es so gut haben, wie unsere anderen Soldaten. (S.93f.)

〔私訳〕今日が聖なる復活祭であるのと同じくらいはっきりと、私は諸君に約束しよう。今「国王万歳」と唱える者には命を保証し、わが軍に採用しよう。そうすれば、諸君はわが軍の他の兵士と同じくらいに命を保持するはずだ。

〔鷗外訳・全集版〕爾等もその鎧を投げ棄て、我白き帽子を戴きて、『國王萬歳』と唱へよ。我神聖なる軍に加へて得させんに。（p.161）

戦僧が捕虜たちに寝返りを強いる場面であるが、鷗外は底本（および私訳）の点線で示した部の、都合三ヵ所を訳出していない。

第一の「今日が聖なる復活祭であるのと同じくらいはっきりと」の部分を鷗外が省略したことについては、その理由が説明し得る。すなわち、キリスト教の祭日になじみの薄い日本人読者に対して、祭日云々の記述を敢えて訳文の中に盛り込まなくとも、物語全体の流れを阻害することはない、という鷗外の判断があったものと推測し得る。

しかし、第二の「命を保証し」、および第三の「諸君はわが軍の他の兵士と同じくらいに命を保持するはずだ」の部分を訳出しなかったことについては、説明が困難である。王党派に帰順するなら、捕虜の命を保証し、かつ元からの王党派兵士と同等の扱いを受けることになるという戦僧の言葉は、捕虜への説得の材料として物語の重要な要素となるからであり、実際に物語では、少年兵士以外の全ての捕虜が王党派に帰順することになっている。こうした、むしろ重要な要素を、鷗外が何故訳出しなかったのかについては、筆者には合理的な説明を見出すことが出来ない。初出『少年園』の掲載スペースの関係で、ある程度訳文の分量を抑える必要があったのか。否、そもそも鷗外が訳出を省略する際に、全て何らかの計算の上でこれを行った、と考えること自体が妥当なのか、という疑問も生じ得るのである。

鷗外が一文を全く訳出しなかった例も見られる。物語の最初の方で、戦僧の人となりを描く部分の一部が、鷗外訳では欠落している。

〔底本〕Wie sein Doppelwesen als Priester und Krieger doch auch schon in seinen Gesichtszügen zum Ausdruck kam! (S.90)

〔私訳〕僧であり且つ戦士であるという二重の存在が、どれほど彼の表情の中にあらわれていたことであろうか！

鷗外がこの部分を訳出しなかった理由ははっきりしない。物語の中心的人物である戦僧が、単なる僧侶でなく、時として敵軍の兵士の殺戮にも加担する存在であること――そしてこのことは、この短編の結末に大きく関わる――を示す、かなり重要な一文である。それを鷗外が敢えて省略した理由は、不明としか言いようがない。強いて言えば、敵軍兵士に対する戦僧の冷酷さを、底本ほどに強調しなくてもよいと訳者鷗外が判断した――ということも、一応は考え得る。

しかし、次に見る省略箇所を検討すれば、むしろ鷗外の訳文が、逆の方向への傾向を見せていることに気づく。すなわち、底本原文の別の箇所では、冷酷無比な戦僧の中に、それとは異なる人間的な一面があることが描かれているが、その部分を鷗外は、部分的にしか訳出しない、あるいは全く訳出しない、という方策を取っているのである。

たとえば、次に示すのは、共和派の捕虜が王党派の陣営に送り込まれてくる少し前の戦僧を描いた部分である。

〔底本〕Wunderbarer Weise war der Priester aber an diesem Morgen in milder und versöhnlicher Stimmung. Die Feier des Hochamts, der Erfolg, den die Seinigen am Tage vorher errungen, vielleicht auch die Weihe des Ostertages hatten ihren Einfluß auf den merkwürdigen Gottesmann ausgeübt und in seinem Gesicht war ein sonst nicht vorhandener Zug von Güte und Freundlichkeit lesbar. (S.91f.)

〔私訳〕奇妙なことに、この日の朝、僧は穏やかで優しい気持ちになっていた。荘厳ミサの祭典や、昨日の自軍の勝利、そしてまた、ひょっとしたら復活祭の聖別式が、この奇妙なる神職の人物に影響を与えたのかも知れない。そしてこの人物の面差しには、普段は見られない善良さと親切心の表情があらわれていたのである。

〔鷗外訳・全集版〕祭を終はりし僧の面は、今日の祭の心に協ひてや、又た昨日の勝を思ひ出でゝや、何時になく優しく見えたり（p.160）

鷗外訳でも確かに、当日の戦僧が普段より優しい気分にあったことは描かれている。しかし、底本原文で最初と最後の二ヵ所においてそのことが描かれているのに対し、鷗外はその前半部分を訳出していない。

同様の、そしてこれ以上に、戦僧の二面性（すなわち、冷酷無比な面と、宥和赦免の要素）を、むしろ一面的なものに還元してしまうような訳文が、物語の最終場面で見られる。死を決意して志を枉げぬ少年に対する、戦僧の心理を描いた部分である。

〔底本〕Angesichts dieser Todesverachtung, dieses Heldenmuthes konnte der Priester eine Regung des Mitgefühls doch nicht unterdrücken. ／„Hast Du noch irgend etwas zu sagen? Willst Du essen? Willst Du trinken?“ (S.96f.)

〔私訳〕死を恐れぬ、この英雄的な気概を目の当たりにして、僧は同情の念を抑えることが出来なかった。／「何か言うことはあるか？　何か食べたいか？　何か飲みたいか？」

〔鷗外訳・全集版〕「生前に望はなきか。」（p.162）

上記引用文の中のスラッシュ記号（／）は、引用文原文で段落が変わっていることを示す。共和派の兵士の中で、一人だけ寝返ることを拒否し、むしろ死を選ぶと述べた十七歳の少年兵士に対し、戦僧は周囲の兵士の一人に命じて、銃口を少年に向けさせる。しかし少年は、眉一つ動かさないで従容として死を迎えようとする。底本では、その場面のすぐ後に、上記の文章が続く。少年兵士の英雄的な気概に対し、敵である筈の戦僧でさえ、同情の念を禁じえなかったという描写であり、戦僧が単に冷酷な人間であるということではなく、一人の生身の人間として、敵軍への帰順よりもむしろ死を選ぶ少年兵士への、一種の共感を示し得る人物としての面も描かれている。

鷗外訳ではこの部分が全く訳出されていない。従って、鷗外の訳文を読む日本の読者は、少年兵士の英雄的な振舞と、これに対して少年の気概を全く感じぬ戦僧の態度を、非常に対比的にとらえることになる。

また段落が変わった後の部分で、底本では、戦僧が少年兵士に対し、具体的に「何か食べたいか？　何か飲みたいか？」と尋ねているが、鷗外はその部分も訳していない。上に引用した箇所の前の部分では、共和派の軍隊で食料が枯渇し、飢餓状態のままに捕虜となった兵士たちたちに寝返りを勧める戦僧の説諭の合間に、堂内ではわざと調理の匂いを漂わせて、この面でも共和派の兵士の心を迷わせるような状況を作り出していた、という描写がある。王党派に帰順した兵士たちには、もちろん直ちに食事が与えられるわけだが、帰順を拒否した少年兵士は、飢餓状態のままに死を選択することになる。底本原文では、戦僧が、せめて死の前に飢えと渇きをいやす機会を与えようと少年兵士に声をかける、という描写がなされているが、鷗外訳では、そこが訳出されていない。結果として、鷗外訳では戦僧の冷酷さを強調する方向の訳文となっている。

底本に描かれている戦僧の二面性を、鷗外が一面化の方向に向かわせたことに関し、強いて理由を考えるなら、少年兵士の英雄的気概を『少年園』の読者に、より強調して伝えるためには、戦僧に人間性の一面の存することを訳文に盛り込まぬ方が、少年の「義士」としての面をより強く印象付けることになる、との鷗外の判断があったとも考え得る。

５　要約的翻訳

鷗外の訳文の中には、文章の一部、あるいは全部を省略するといった次元を越えて、省略を含みつつ、さらに底本原文の構造をかなり変形して訳出した場合も多い。以下に検討するのは、物語の最初の方で、捕虜となった共和派の兵士たちが、その冷酷さが敵方にも知れ渡っている戦僧（底本の„er“、私訳の「彼」）の前に引き据えられて、今後の行く末を案じる場面である。

〔底本〕„Was hat er mit uns vor?“ fragten sich die erschrockenen Gefangenen, und indem sie das Ende der Messe abwarteten, gingen ihnen alle die Geschichten von der unbändigen Wildheit und Grausamkeit des Feldpredigers durch den Kopf, die sie hatten erzählen hören und die ihn zu einer über die Maßen gefürchteten Persönlichkeit in der karlistischen Armee gemacht hatten. (S.91)

〔私訳〕「彼は我々をどうするつもりだろう」と、怯え切った捕虜たちは自問した。そして祈祷が終わるのを待つ間、戦僧の異常なまでの野蛮さ、残酷さが、捕虜たちの脳裏

をよぎった。その野蛮さ、残酷さは、捕虜たちの耳にも届いていていたものであり、戦僧をカルロス王の軍隊の中でもひときわ恐れられた人物にしていたのである。

〔鷗外訳・全集版〕當時世の中に語り傳へたる、戰僧の異教の人に接する苛虐の跡を、彼是と思ひ合せて、牽き据ゑられし俘虜は安き心もなかりしが、……（p.160）

一見して分かるように、鷗外の訳文はわずか二行で、底本のかなりの部分（点線のアンダーラインを引いた部分）を訳出していない。しかも底本の一つの段落を、鷗外は一文に要約的に翻訳している。

それに加え、引用した鷗外の訳文が「なかりしが、……」で終わっていることから分かるように、鷗外訳では上記の訳文の後に、さらに底本の次の段落の最初の文章を繋げて訳出している。つまり、鷗外は底本のドイツ語のかなりの部分を省略しつつ、自分が訳出した部分も、原文の次の段落に接合せしめるという、かなり自在な訳文を作ったわけである。

次の例は、話の本筋にあまり関係のない部分を抄訳した例である。

〔底本〕Sobald der Gottesdienst beendet, und während der Sakristan noch mit dem Abräumen des Altars beschäftigt war ― er schloß die geweihten Geräthe in eine Kiste, die beim Marsche einem Maulthier aufgeladen wurde ― (S.92)

〔私訳〕礼拝が終わるとすぐに、そして聖具室係の男がまだ祭壇の片付けをしている最中に ―― 係の男は神器類を、行軍の間騾馬の背に乗せられていた箱の中に仕舞っていた ――

〔鷗外訳・全集版〕徒弟は驢馬に着くる様に拵へたる箱に祭の品々を収むる中に、(p.160)

ここでも私訳で三行にわたる内容が、鷗外訳では一行分に切り詰められている。引用した底本ドイツ語は、文法用語でいう副文にあたり、実はこの後に主文が続く。本論文では引用していないが、主文の主語は戦僧である。逆に言うと、副文で描写されている聖具室係の男の仕事ぶりは、この物語の中心人物とは直接関係がない。鷗外は、そのような言わば周辺的な描写の部分を切り詰めて訳し、そのことにより読者の視線を戦僧の振舞に焦点化せしめようとしたものと考えられる。

６　翻訳技法と誤植

前節までに述べたように「戰僧」には、大きく分けて「創作的付加」「省略」「要約的翻訳」の三つの特質が見られた。本節以降第８節まで、その他のこまごまとした点について、さらに検討を進めたい。

本節では、鷗外のその他の翻訳技法を一つ、及び一見誤訳と思われる箇所について論じる。まず検討するのは、ドイツ語の形容詞を訳文において補語（述語）のように翻訳することによって、過去形の羅列を避ける翻訳技法である。

〔底本〕Er bot einen eigenthümlichen Anblick, dieser Militärpriester, der inmitten der Krigerschaaren seinen Dienst verrichtete. (S.90)

〔私訳〕彼、すなわち戦士たちの中央で勤行をなしていた戦僧は、独特の様子を見せていた。

〔鷗外訳・全集版〕此隊伍の中央にありて神に事ふる戰僧の形は世の常ならず。（p.159）

鷗外訳と私訳の違いを単純化して述べれば、底本で「戦僧は、独特の様子を見せていた」となっている部分を、鷗外は（現代風に書き直すと）「戦僧の様子は独特である」と訳した、ということになる。すなわち、形容詞 eigenthümlich（独特の）が名詞 Anblick（様子）を修飾するという底本の構造を棄て、鷗外は敢えて名詞 Anblick を主語のように、そして形容詞 eigenthümlich を補語（述語）のように訳している。私訳ではそこを、底本の構造のままに訳したが、私訳のような訳し方では、文末が過去形になる。物語文では、過去形が続くのは当然のことであるが、日本語の場合、「～した、そして～した。そして～した」等々と過去形が続くのは、文章が単調になる嫌いがある。そこで鷗外はドイツ語文の構造を敢えて

棄てたのであろう[7]。

もう一つ指摘すべきは誤訳である。「誤訳」と表現したが、以下に見るように、およそ誤訳しようのない語彙の誤訳であり、何らかの単純ミスの可能性がある。

〔底本〕… rief der Priester die Gefangenen zu sich heran.　Es waren etwa zwölf　Soldaten der republikanischen Armee.　(S.92)

〔私訳〕僧は捕虜たちを自分の所に呼び寄せた。それは共和国軍のおよそ十二人の兵士であった。

〔鷗外訳・全集版〕……戰僧は共和軍の俘虜十三人を、身邊近く喚び寄せたり。（p.160）

「およそ十二人」と訳すべき所を、鷗外は「十三人」と訳している。数詞を間違えるという、およそ信じ難い不可思議な間違いである。はたして、鷗外がミスを犯したのか。

初出『少年園』版を見れば、疑問は氷解する。そこでは正しく「十二人」と訳されているのである。以下に、『少年園』版、再掲である『柵草紙』版、そして再々掲である『水沫集』版の当該部分を引用する。

〔鷗外訳・少年園版〕……戰僧は共和軍の俘虜十二人を、身邊（ほとり）近く喚（よ）び寄せたり。（『少年園』第 10 号 p.15）

〔鷗外訳・柵草紙版〕……戰僧は共和軍の俘虜十二人を、身邊近く喚び寄せたり。（『柵草紙』第 21 号 p.26）

〔鷗外訳・水沫集版〕……戰僧は共和軍の俘虜十三人を、身邊近く喚び寄せたり。（『水沫集』p.22）

『少年園』版が『柵草紙』に再掲される際には正しく「十二人」と記されていたのに、『水沫集』に採録された時に、ミスが生じた。おそらくは誤植であり、それを『水沫集』の編集者が見落としたのであろう。

捕虜の数が十二人であるか十三人であるかは、この物語において大きな意味を持つわけではない。底本の「およそ十二人」という表現の中に含まれる「およそ」(etwa)という語彙からも分かるように、底本でも概数で捕虜の人数が示されていて、一ダースの区切りのよい十二が使用されていたものであることからも、それがうかがえる。『水沫集』の編集者が誤植に気づかず、それが最終的に岩波版『鷗外全集』にまで引き継がれたことになる。

7　鷗外による書き込みについて

鷗外文庫所蔵の「戰僧」翻訳底本には、鷗外によるドイツ語の書き込みが二カ所ある。いずれも、底本のドイツ語、あるいはラテン語の意味を、別のドイツ語で記したものである。

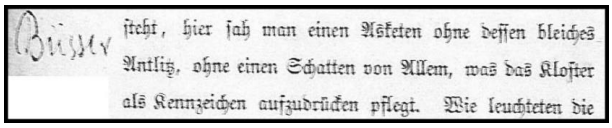
〔底本〕　… hier sah man einen Asketen ohne dessen bleiches Antlitz, ohne einen Schatten von Allem, was das Kloster als Kennzeichen aufzudrücken pflegt. (S.90)

〔私訳〕……ここでは苦行僧が、青白い顔もせず、また修道院らしいあらゆる影も見せていなかった。

〔鷗外訳・全集版〕……此懺悔の面上には、彼重垣に圍まれたる寺院の人の容貌に捺す印とては影だに見えず。（p.159）

戦僧が、戦闘に参加する軍人でもあるため、顔は陽に焼け、修道院で苦行をつむ僧とは思えぬ姿を見せていた、という描写の部分である。この箇所の鷗外文庫所蔵本欄外に Büsser との書込がある。（図版 1 を参照）

[7] 過去形の羅列を訳文で避けるべく、底本原文の構文を敢えて変形して訳す技法は、鷗外の他の翻訳作品にも見られる技法である。拙論「鴎外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（2）― 過去形の羅列を避ける技法 ―」（大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2014 言語文化の比較と交流 2』〔2015 年〕所収）を参照。


Büsser steht, hier sah man einen Asketen ohne dessen bleiches Antlitz, ohne einen Schatten von Allem, was das Kloster als Kennzeichen aufzudrücken pflegt. Wie leuchteten die

【図版１】

Büsser は現代の綴りでは Büßer であり「悔悛者」の意味となる。鷗外訳では「懺悔」にあたる。おそらく翻訳底本の Asket（「苦行僧」の意の外来語系ドイツ語）の意味を別のドイツ語で記したものであろう。鷗外の「懺悔」という訳語であるが、初出『少年園』版「戰僧」では「懺群者」となっている（『少年園』第 10 号 p.14）。

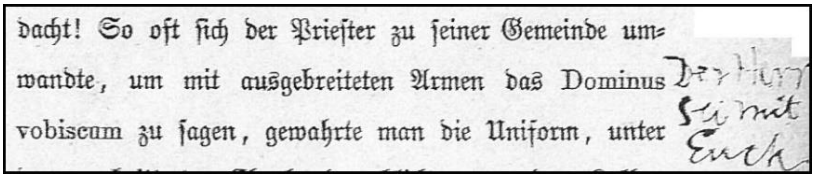
もう一つの書き込みは、ミサで使用されるラテン語の意味をドイツ語で記したものである。

〔底本〕 So oft sich der Priester zu seiner Gemeinde umwandte, um mit ausgebreiteten Armen das Dominus vobiscum zu sagen, ... (S.91)

〔私訳〕僧が両腕を広げて「主なんじらとともにあれ」と述べるために、信者のほうに向きを変えるたびに、

〔鷗外訳・全集版〕僧が聽衆に向ひて兩手を差し伸べて、「神は爾等と倶にあれ」と唱ふる毎に、（p.160）

当該箇所欄外に、Der Herr sei mit Euch との書込がある。（図版２を参照）


dacht! So oft sich der Priester zu seiner Gemeinde umwandte, um mit ausgebreiteten Armen das Dominus vobiscum zu sagen, gewahrte man die Uniform, unter

【図版２】

これは「主が汝とともにあらんことを」の意であり、翻訳底本のラテン語 Dominus vobiscum の意味をドイツ語で記したものである。『独和大辞典』（小学館、1990 年）によれば、Dominus vobiscum は「主なんじらとともにあれ」の意で、ミサ等で司祭が信者に対してなす挨拶の言葉である由。

鷗外文庫所蔵の他の独語書籍では、鷗外の読後感が漢文で書き込まれたり、読了した日付が記されたり、あるいは翻訳を雑誌に分割掲載する際の区切りが数字や記号で示される等々の書き込み事例が見られるが、「戰僧」では上記二か所以外には書き込みが見られない。

８　『少年園』掲載版のルビについて

本節では、初出『少年園』版「戰僧」に付されたルビについて検討する。初出『少年園』版ではルビが多用されているのに対し、その後の版では、ルビは使用されていない。初出でどの程度ルビが使用されていたのか、一例として「戰僧」冒頭部分の訳文を下に掲げる。

〔鷗外訳・少年園版〕誦經聲歇(じゅきやうこえや)みしとき、新に獲たる俘虜(とりこ)を戰僧(せんそう)の前へ牽(ひ)き据(す)へたり。（『少年園』第 10 号 p.13）

〔鷗外訳・全集版〕誦經聲歇みしとき、新に獲たる俘虜を戰僧の前に牽き据ゑたり。（p.159）

この例だけを見れば、単に「初出で存在したルビが、再掲版以降では削除された」という、きわめて単純な事実の確認に止まる。だが、以下に示す例では、底本ドイツ語文の解釈に関わる重要な要素が、ルビの付け方に関連していることが分かり、ひいては鷗外の翻訳原稿がどのように雑誌に掲載されるに至ったのかさえ推測させる契機を与えることになる。

それは「戰僧」の後半の部分に見られる一文である。王党派に帰順することを拒否している少年兵士に対して、寝返りを強いる「手段」が自分にはあると、戦僧が半ば脅迫的に銃殺を示唆する場面である。それに対し少年は次のように応え、脅迫に屈しないことを述べる。

〔底本〕„Ich verachte Deine Mittel!“ rief der Knabe mit stolzer Handbewegung. (S.96)

〔私訳〕「私はあなたの手段を恐れない。」少年は誇らかな手振りを見せて叫んだ。
〔鷗外訳・全集版〕「その術は、余が屑とせざる所なり。」（p.162）

底本（および私訳）を見れば分かるように、少年兵士はなおも寝返りを拒否し、むしろ誇り高く死を選ぶ旨を述べている。鷗外訳・全集版では、地の文が訳出されずに、少年兵士の言葉だけが訳されているが、そこが「その術は、余が屑とせざる所なり」となっている。この訳文の「屑」が問題で、もしもそれを「くず」と読むなら、意味が通じない。仮に「くずとせず」という表現があるとして、強いて解釈するならば、少年兵士は「その手段は屑ではない」、すなわち「その手段は悪くはない」と述べたことになり、意味が逆になってしまう。「屑」を「くず」と読ませるなら、むしろ「その術は、余が屑とする所なり」のように、「屑とせざる」ではなく「屑とする」にしなければ、底本ドイツ文の意味を反映したことにはならない。しかし実際には、鷗外の訳文は「屑とせざる」になっている。ということは、「屑」を「くず」とは読まない可能性が残るのではないか。

そこで筆者は、『少年園』版で「屑」にいかなるルビが振られているかを確認することにした。その結果は以下の通りである。

〔鷗外訳・少年園版〕『その術は、余が屑（ものゝくづ）とせざる所なり。』[8]（『少年園』第 10 号 p.16）

意外というべきか、「屑」に「ものゝくづ」というルビが振られている。つまり、意味の通じ難い、あるいは意味の通じないルビが、初出で示されているわけである。初出のルビを見れば明快な解釈が得られるとの筆者の当初の目論見は、見事に瓦解した。だが鷗外は、本当に「屑」を「ものゝくづ」と読ませたかったのか。

ここで改めて「屑」の字義を調べてみると、はたせるかな「いさぎよし」との読みがあった。この読みで正しいなら、銃殺を示唆しつつ寝返りを迫る戦僧に対し、少年兵士が「その術は、余がいさぎよしとせざる所なり」と述べたことになり、全く意味が通じる。

ここからは筆者の推測にすぎないが、おそらくは鷗外が『少年園』編集部に提出した原稿にはルビが振られていなかったのではないか。少年向け雑誌である『少年園』誌の編集者は、自らの雑誌の読者層の受容能力を考えて、ルビのない鷗外の元原稿に対して、雑誌掲載の過程で新たにルビを付加したのではないか。そして、その際に編集者が、「戦僧」の前後関係を顧慮せずに（もちろん翻訳底本のドイツ文を読むことなしに）、単純作業として漢字の一部にルビを付す作業を行い、その際思わぬミスが生じたのかも知れない。

以上は単なる推測にすぎないが、鷗外の訳稿が雑誌等に掲載されるに際し、編集者がどの程度訳稿に手を加えたのかを推測し得る、一つの実例を提供してくれるものであろう[9]。

９　おわりに

森鷗外の初期翻訳作品を検討してみると、その自在さが目に付く。本論文で検討したように、底本に存在しない文言の創作的付加がある一方、省略や要約的翻訳も見られる。このような翻訳態度が、鷗外の諸々の翻訳のいつごろまで続くのか、ということは、筆者の今後の検討課題である。また、初期鷗外の翻訳流儀が、ひとり鷗外だけの流儀なのか、それとも明治翻訳界に通底する潮流の一つであったのか、ということも大きな問題である。

「戦僧」に限って言えば、本論文で示したように、鷗外の翻訳原稿に元々ルビが振られていたのかどうか、という問題が見えて来た。また初出と再掲、再々掲を比較することによって、途中から誤記（誤植）が生じ、結果的に鷗外が誤訳をなしたように見えるケースもあった。鷗外の訳文を検討する際、今日容易に手に入る全集版のみを見ていたのでは見落とす諸問題が存在することが、「戦僧」の分析によって明らかになった。

鷗外の翻訳を、明治獨逸学史、あるいは明治洋学史の中に位置づけて検討することによって、鷗外の翻訳流儀のさらなる解明がなされるものと思われ、それが今後の研究課題となろう。

---

[8] 会話文を『　』でくくるのは、原文のままである。

[9] 前掲『鷗外全集』第1巻「後記」(p.646)には、初出『少年園』版において「屑」に「ものゝくづ」とのルビが振られている旨が記されている。しかし、その当否については判断が示されていない。

Reception of Latin vocabulary and introduction of new words in *An Alphabet of Tales*[1]

Ayumi Miura

1 Introduction

Latin *Alphabetum Narrationum* (*AN*) is a collection of about 800 short sermon exempla arranged in alphabetical order from 'Abbas' to 'Zelotipa' and comprises romances, fables, humorous tales, anecdotes, saints' legends and pious tales from the Middle Ages (Fittabile 1957: 7–11). These exempla provide an insight into the domestic life in medieval Europe and preach church doctrine to the lay audience in an entertaining and approachable way. Surviving in more than fifty manuscripts, *AN* is thought to have been originally compiled around the turn of the fourteenth century by a monk named Arnold who belonged to a Cistercian community in the Liège area (Johnson 1993: 16–23).

An English translation of *AN*, known as *An Alphabet of Tales* (*AT*), was made in the mid-fifteenth century, presumably in Salley Abbey located in the Ribble area where Lancashire adjoins Yorkshire (Johnson 1993: 77–84), 'probably to provide impetus for religious renewal in some remote spot in the English northland' (ibid.: 4). The translator has not been identified to date. *AT* survives in only one manuscript (British Museum Additional MS 25,719), apparently written in one hand, and the two-part edition by Banks (1904–1905) seems to be the only complete edition available today. Despite being a valuable text to study 'everyday fifteenth-century vocabulary and syntax' (Johnson 1993: iv), the language of *AT* has attracted very limited attention. This could be partly because Part III of Banks' edition, which had planned to comprise an introduction, glossary and index, was never published, thus failing to offer supplementary tools which are available in most texts for a linguistic and textual study.

Fortunately, a comprehensive glossary of the whole work is included in dissertations by Fittabile (1957) and Johnson (1993), and the completion of the *Middle English Dictionary* (*MED*), particularly its free online access, now allows a detailed study of the vocabulary in *AT* and any Middle English (ME) work. Nevertheless, a crucial shortcoming still remains: neither Fittabile nor Johnson attempts a comparison with the Latin source *AN*. The same applies to previous discussions of some syntactic features in *AT*, which either disregard the translation effect (Saito 1970) or note it only briefly without actually consulting the relevant part in *AN* (Loureiro-Porto 2009: 137–140; Miura 2015: 75, 81). Given Fittabile's (1957: 4) observation that *AT* is 'a faithful, if occasionally inaccurate rendering of the Latin', we can expect a considerable amount of Latin influence in the vocabulary and syntax of *AT*. A close linguistic comparison between *AT* and *AN* may not have been conducted because the text of *AN* was not easily accessible. This situation, however, has recently been resolved by Brilli (2015), a critical edition based on the extant manuscripts of *AN*.[2]

This paper aims to fill the gap in the previous studies on the language of *AT* by examining the degree in which the vocabulary in *AT* is influenced by the language of *AN*. In so doing, I will also attempt to exemplify a process of the reception of Latin vocabulary in late ME, or more precisely in mid-fifteenth-century northern England, and to reveal the lexical choices made by the translator in order to render Latin *AN* into English. The specific subject of investigation in this article is the group of words which are known to have been first recorded in *AT* as far as we can determine from the evidence in the *Oxford English Dictionary* (*OED*) and the *MED*. It is assumed that these words were born because the translator could not think of an appropriate counterpart in the contemporary English vocabulary. If *AT* is indeed a 'faithful' translation of *AN* as Fittabile (1957: 4) says, these new words are hypothesised to be more Latin-based than the existing English words.

The organisation of this paper is as follows. The next section describes the methodology followed in order to establish the data under study, that is the list of newly coined words. Section 3 constitutes the core of the paper and offers a detailed quantitative and qualitative analysis of these words in terms of part of speech, semantic field, productivity in *AT*, transmission to other works during and after ME, word-formation patterns and correspondence with Latin words and expressions in *AN*. The

[1] The research for this paper was supported by the Japan Society for the Promotion of Science, Grant Number 19K13222 and 22K00619.

[2] Banks used two of these manuscripts, namely British Museum Harleian MS 268 (second half of the fourteenth century) and Arundel MS 378 (early fifteenth century), to produce her edition.

etymology of each word will also be considered with special reference to Latin equivalents. Section 4 offers the main concluding remarks.

2 Data and methodology

The first step in this study involved the compilation of a complete, accurate list of words first recorded in *AT*. For this purpose, I searched the quotations in the *OED* and the *MED* to identify citations ascribed to this work by title and then checked the date provided. As we will see, this was not straightforward given the different conventions in each dictionary and even within the same dictionary.

Citations from *AT* in the *OED* are categorised in different ways. A number of entries from 'S' onwards, especially 'S' and 'T', display the date c1440 before the title of the work (*Alphabet of Tales*), while the other entries display a slightly later date, c1450.[3] Besides, in the c1450 entries this string of date and title of the work is regularly accompanied by '(1904) I.' (i.e. Part I of Banks' edition published in 1904) or '(1905) II.' (i.e. Part II published in 1905), which is then followed by the page number for the citation (e.g. *massage*: c1450 *Alphabet of Tales* (1904) I. 58; *popeship*: c1450 *Alphabet of Tales* (1905) II. 402). The entry for *globe* exceptionally has only the page number after the date and title of work ('c1450 *Alphabet of Tales* 323'). The label for the c1440 entries usually has the page number alone after the title of the work, but there are sporadic cases of the tale number appearing before the page number (e.g. *scantly*: c1440 *Alphabet of Tales* ix. 8).[4] More unexpectedly, the entries for *senior* and *shine* show the page number and line number for the citation (e.g. *senior*: c1440 *Alphabet of Tales* 233/26).

Notwithstanding these variations in the date and bibliographic information, all citations of *AT* in the *OED* seem to share '*Alphabet of Tales*' as the title of the work. A search for this string in the quotations by means of the tool 'Advanced search' yielded 840 results in 701 entries, which were manually looked up in order to extract the entries where an occurrence in *AT* was acknowledged as the earliest evidence. After eliminating phrases and idioms like *as mad as a goose*, *out of knowledge* and *to take thought*, a provisional list of ninety-one words was created, to be compared with a separate list based on the *MED* evidence.

Citations from *AT* in the *MED* have the title stencil 'c1450 Alph.Tales (Add 25719)', but searching this whole stencil or 'Alph.Tales (Add 25719)' in the option 'Entire entry' yielded either a vast number of irrelevant results (when this label was searched without being enclosed in quotation marks) or no match at all (when it was searched with quotation marks). When the search term was narrowed to 'Alph.Tales', 2,224 hits were obtained, all but one of which were entries with at least one citation from *AT*. The exception was the entry for the consonant cluster *qu-*, where 'Alph.Tales' appears in the passage for 'Definitions (Senses and Subsenses)'. Another search with '25719' was carried out to double-check the previous list of hits. This resulted in 2,224 hits again, but they differed from the previous outcome in a couple of respects. First, the entry for *qu-* was not included (because the passage only said 'Alph.Tales', not 'Alph.Tales (Add 25719)'). Second, there was a false hit, i.e. entry for *wis(e* n.(2), which does not actually contain '25719'. The exact result of 2,223 hits, with no irrelevant entry, was obtained by searching 'Add 25719' with quotation marks.

Each of these entries was manually checked with a view to identifying those which acknowledge *AT* as the earliest occurrence of the headword. The resulting eighty-four words and the above-mentioned ninety-one words from the *OED* were compared with each other, and those which turned out to have earlier textual evidence than *AT* in the other dictionary were removed. The breakdown of the final list of 103 words, including compounds, with their parts of speech in parentheses and meanings,[5] is shown below (the spelling follows the *OED* headword as long as it is available):

(I) Earliest attestations in both the *OED* and the *MED*: thirty-four words

[3] Different dates are used even in the same entry. One of the fifteen citations in the entry for *unto* has the date c1440, while the others are dated to c1450. The entry for *with* (prep., adv., and conj.) dates the first four citations to c1440 and the last to c1450.

[4] Other examples which follow this pattern are *shall*, *turn* (n.), *wand* (n.), *wed* (adj.), *wherein* and *win* (v.).

[5] The part of speech follows the one given in the *OED* and the *MED*. Two categories are provided (e.g. n./ger., adj./ppl.) when these dictionaries differ in labelling.

abbotship (n.) 'the office of abbot', *abusing* (n./ger.) 'misuse, abuse', *agateward* (adv.) 'on the road', *amorosity* (n.) 'amorousness', *angriness* (n.) 'anger', *globe* (n.) 'a sphere', *manlily* (adv.) 'valiantly', *massage* (n.) 'the action of saying Mass', *pig* (n.) 'a container for wine', *popeship* (n.) 'the office of Pope', *proceed* (n.) 'a verdict', *psalmody* (n.) 'the singing of Psalms', *publical* (adj.) 'public', *reknowledge* (v.) 'acknowledge', *revestiary* (n.) 'the vestry of a church', *salfay* (n.) 'the reward paid for the recovery of lost property',[6] *skifting* (n./ger.) 'division', *sluggish* (adj.) 'indolent', *sluggishness* (n.) 'indolence', *sorance* (n.) 'a sore', *springald* (n.) 'a youth', *stout and rout* (adv.) 'completely',[7] *stoutherie* (n.) 'theft', *striddling* (adv.) 'astride', *succeeder* (n.) 'a successor', *sumption* (n.) 'the action of receiving the sacrament of the Eucharist', *tunsion* (n.) 'the action of beating', *ugsomely* (adv.) 'in a terrifying manner', *unbehovable* (adj.) 'unsuitable', *undoffed* (adj./ppl.) 'not removed', *unsoundable* (adj.) 'improper', *unto-come* (v.) 'to arrive', *usurary* (n.) 'a moneylender', *yedder* (n.) 'the mark of a blow'

(II) Other new words from the *OED*: twenty-seven words
city gate (n.) 'city gate', *Fastingong Eve* (n.) 'the evening of Shrove Tuesday', *mass clothes* (n.) 'mass vestments', *natural fool* (n.) 'a congenital fool', *pale-hued* (adj.) 'pallid', *palm leaf* (n.) 'a leaf of a palm tree', *parsley-bed* (n.) 'a plot of parsley', *pit brae* (n.) 'the edge of a pit', *porch door* (n.) 'porch door', *prayer saying* (n.) 'the act of praying', *priest hermit* (n.) 'a priest living as a hermit', *professed* (n.) 'a professed monk', *purse-master* (n.) 'a treasurer', *sacrament-box* (n.) 'a pyx', *sark-skirt* (n.) 'a shirt skirt', *scuttleful* (n.) 'as much as a basket can hold', *sow-pap* (n.) 'a sow's teat', *spiteful* (adv.) 'outrageously', *steeple-top* (n.) 'the top of a steeple', *swine bristle* (n.) 'hog bristles', *thunderbolt* (n.) 'a lightning bolt', *thyne-forth* (adv.) 'thenceforth', *vanity sight* (n.) 'an illusion', *vine-garth* (n.) 'a vineyard', *well-nurtured* (adj.) 'well brought up', *well-savouring* (adj.) 'having a pleasant flavour', *wolf den* (n.) 'a wolf's lair'

(III) Other new words from the *MED*: forty-two words
apocryphate (n.) 'a spurious man', *assecuten* (v.) 'attain', *bafen* (v.) 'slaver', *becovnand* (ppl.) 'put under pledge', *bedfellow* (n.) 'a close friend', *benevolous* (adj.) 'well-wishing', *besprinkle* (v.) 'bespatter', *cirographat* (n.) 'a formal handwritten document', *dashing* (n./ger.) 'splashing', *deaconship* (n.) 'the office of deacon', *debatous* (adj.) 'quarrelsome', *deceitfully* (adv.) 'dishonestly', *defer* (v.) 'defer to', *disclaundring* (ger.) 'slandering', *disple* (v.) 'discipline', *enjugement* (n.) 'a judgement', *falset* (n.) 'treachery', *familary* (adj.) 'intimate', *foisonable* (adj.) 'abundant', *Gotham* (n.) 'Gotham (an unidentified town in England)', *heighten* (v.) 'exalt', *hereat* (adv.) 'about this', *horn-faste* (adv.) 'with great security', *il-faringlie* (adv.) 'badly', *ill-willed* (adj.) 'unwilling', *infame* (n.) 'dishonourable act', *inlike* (adj.) 'alike', *innocentrie* (n.) 'innocence', *instinction* (n.) 'instigation', *launderer* (n.) 'laundress', *lengthen* (v.) 'lengthen', *literature* (n.) 'knowledge from books', *ludification* (n.) 'deception', *maniple* (n.) 'a maniple', *o-dead* (adv.) 'to death', *practise* (adj.) 'proficient', *privalie* (adj.) 'private', *sparrer* (n.) 'closer', *trowable* (adj.) 'believable', *unseverable* (adj.) 'unserviceable', *uppermost* (adj.) 'outermost', *wedman* (n.) 'a married man'

The *OED* and the *MED* agree that words in the first group are first attested in *AT*. The second group also represents words which the *OED* ascribes to *AT* as the earliest attestation, but none of them is a headword in the *MED*. Except for *professed* and *spiteful*, these words are compounds and subsumed under the entry for the first and/or second element of the compound.[8] All of these *MED* entries cite the use in *AT* and do not provide any older evidence for the compound. *Professed* has a slightly earlier record as adjective (*OED* s.v. *professed* adj. and n.), but the first nominal use is

[6] The *OED* has a separate and more detailed entry with *saufey* as headword, which includes all the three citations in the entry for *salfay* and offers additional information. *Salfay* is selected in the list because its entry and the corresponding *MED* entry are cross-referred to each other.
[7] The *MED* has a separate entry for *stoute* (n.) and *route* (n.).
[8] The *OED* is more likely than the *MED* to treat compounds as independent headwords 'on account of their later importance in the history of English' (Durkin 2014: 257).

attributed to *AT*, and the *MED* (s.v. *professen* v. 2. (d)) cites only the occurrence in *AT*. Similarly, *spiteful* is attested slightly earlier as adjective in both the *OED* and the *MED*, but the first adverbial record is found in *AT*.

The third group is made up of *MED* headwords, about half of which antedate the *OED* counterparts (e.g. *deaconship*, *ludification*, *unseverable*). The others have no entry in the *OED* (e.g. *bafen*, *innocentrie*, *sparrer*) or document an earlier evidence in the *OED* from another text, to which the *MED* gives a date later than *AT* (e.g. *besprinkle* from *Gesta Romanorum*, dated c1440 in the *OED* and a1500 in the *MED*; *ill-willed* from Richard Rolle's *Psalter*, dated a1340 in the *OED* and a1500(c1340) in the *MED*). For the latter words, the *MED* date was prioritised as it is more precise than the *OED* date. The two exceptions to any of the three patterns mentioned so far (*literature* and *maniple*) illustrate the rare case where the *MED* cites *AT* and another work of exactly the same date as the earliest evidence but the *OED* cites only the latter work (c1450 *De Claris Mulieribus* for *literature*; c1450 *Speculum Christiani* for *maniple*). Regardless of these different features, the forty-two words in this group can be considered as having originated in *AT*, just like the first two groups.

3 Data discussion

The 103 new words in *AT* which were finalised in Section 2 will now be closely examined according to several factors: part of speech and semantic field (Section 3.1), productivity or frequency in *AT* and transmission to other ME and post-ME works (Section 3.2), word-formation patterns (Section 3.3) and correspondence with Latin (Sections 3.4 and 3.5). Discussion of the last factor, correspondence with Latin, will involve a detailed lexical comparison between *AT* and *AN* with due attention to the etymology of the English words.

3.1 Part of speech and semantic field

The new words in *AT* are all content words. Noun is by far the most dominant part of speech (sixty-two words), followed by adjective (nineteen words), adverb (twelve words) and verb (nine words). As one might reasonably expect from a translation of sermon exempla, not a few terms are related to religion (e.g. *Fastingong Eve*, *maniple*, *popeship*, *revestiary*, *sumption*), abstract notions (e.g. *angriness*, *benevolous*, *innocentrie*, *ludification*, *sluggishness*) and professions (e.g. *launderer*, *purse-master*, *usurary*). Nevertheless, there are also everyday words (e.g. *hereat*, *il-faringlie*, *manlily*, *stout and rout*, *wedman*) as well as words denoting places and everyday products (e.g. *city gate*, *parsley-bed*, *sark-skirt*, *uppermost*, *vine-garth*). We can thus infer that the translator adopted these new words not only to express key concepts in *AN* but also to add variety to the whole vocabulary and engage readers into the translation.

3.2 Productivity in *AT* and transmission to subsequent works

In addition to identifying the first attestations, it is also relevant to know the extent to which these words were employed in *AT* itself as well as its transmission to other works in ME and afterwards up to the present day. For this purpose, I have checked the token frequency of each of the 103 items against the glossaries in Fittabile (1957) and Johnson (1993) and double-checked the outcome with a search of Banks' edition in the online Corpus of Middle English Prose and Verse. It turned out that the above words generally have limited attestations in *AT* and subsequent works of ME. As Table 1 on the next page shows, the majority of them (72.8 per cent) occur only once in *AT*, and most of the others have either two or three tokens.

The combined evidence from the *OED* and the *MED* suggests that slightly more than half of the words (fifty-six; 54.4 per cent) are found exclusively in *AT* during ME; these effectively nonce words are indicated by an asterisk in Table 1. Judging from the number of illustrative quotations in the *OED* and the *MED* entries, even those which were adopted in other texts after their first use in *AT* appear to have been hardly productive during ME. This may be partly inevitable if we bear in mind that *AT* was translated only near the very end of the period. Still, most words have just one to three citations besides those in *AT*, and only *bedfellow*, *ill-willed*, *infame*, *literature*, *natural fool*, *psalmody* and *sluggish* have four or more citations in their *MED* entries. To give a few instances, the *MED* has only two citations for *Gotham*, one from *AT* and the other from *Towneley Plays* (a1500(a1460)), the latter being the sole ME citation in the *OED*. *Deceitfully* has two non-*AT* citations in the *MED*, one from *Paston Letters* (1464) and the other from *Proceedings in Chancery*

(1473–1475), but neither of these is recorded in the *OED*, and the only pre-1500 example is from Scottish *Actis & Deidis Schir William Wallace* (1488(c1478)). Lastly, *literature* has four non-*AT* citations in the *MED* (c1450 Boccaccio's *De Claris Mulieribus*; ?a1475(?a1425) Higden's *Polychronicon*; c1475 Chaucer's *Canon Yeoman's Tale*;[9] a1500 Alain Chartier's *Le Traite de l'Esperance*), the first two of which are quoted in the *OED* along with an instance in Skelton's *Bowge of Courte* (?c1499).

Table 1: Tokens of new words in *AT*

Token	Word	[* exclusive to *AT* during ME]
8	1	*manlily*
5	2	*familary*, **professed*
4	1	**stoutherie*
3	8	*abbotship*, *angriness*, **enjugement*, **o-dead*, **prayer saying*, *sluggish*, **usurary*, **vine-garth*
2	16	**cirographat*, *falset*, **Fastingong Eve*, *infame*, *literature*, **palm leaf*, **popeship*, *psalmody*, **salfay*, *sluggishness*, *sorance*, *thyne-forth*, *uppermost*, *wedman*, *well-savouring*, *yedder*
1	75	**abusing*, **agateward*, *amorosity*, *apocryphate*, **assecuten*, **bafen*, **becovnand*, *bedfellow*, *benevolous*, *besprinkle*, **city gate*, *dashing*, **deaconship*, *debatous*, *deceitfully*, *defer*, *disclaundring*, *disple*, **foisonable*, **globe*, *Gotham*, *heighten*, *hereat*, **horn-faste*, *il-faringlie*, *ill-willed*, **inlike*, *innocentrie*, *instinction*, *launderer*, **lengthen*, **ludification*, *maniple*, **mass clothes*, **massage*, *natural fool*, **pale-hued*, **parsley-bed*, *pig*, **pit brae*, **porch door*, **practise*, **priest hermit*, **privalie*, **proceed*, **publical*, *purse-master*, **reknowledge*, *revestiary*, **sacrament-box*, **sark-skirt*, **scuttleful*, **skifting*, **sow-pap*, **sparrer*, *spiteful*, **springald*, *steeple-top*, *stout and rout*, **striddling*, *succeeder*, **sumption*, **swine bristle*, *thunderbolt*, *trowable*, **tunsion*, **ugsomely*, **unbehovable*, **undoffed*, **unseverable*, **unsoundable*, **unto-come*, **vanity sight*, *well-nurtured*, **wolf den*
Total	103	

If we expand the scope beyond ME, the *OED* entries show that the words in Table 1 also vary in post-ME productivity, which is in line with the low frequency reported above. The twenty-nine words listed in Table 2 (28.2 per cent of the new words) are not attested after 1500. Most of these are limited to *AT*, and as many as eighteen – words in the middle column in the table – are hapax legomena.

Table 2: New words in *AT* unattested after 1500

Attestations exclusive to *AT*		Others
Two or more tokens	Only one token	(found in later ME works)
cirographat, *enjugement*, *o-dead*, *usurary*, *vine-garth*	*assecuten*, *bafen*, *becovnand*, *horn-faste*, *inlike*, *massage*, *pig*, *practise*, *privalie*, *sacrament-box*, *sark-skirt*, *skifting*, *sow-pap*, *sparrer*, *unsoundable*, *unto-come*, *vanity sight*, *wolf den*	*disclaundring*, *familary*, *il-faringlie*, *innocentrie*, *stout and rout*, *wedman*
5	18	6

[9] This example in Chaucer, which belongs to the age before the production of *AT*, should most probably be subsumed in the entry for *lettrure* 'book learning', a borrowing from French first recorded in English in c1330. *Literature* is a borrowing from Latin.

This leaves us with seventy-four words (out of 103) which have any record in the *OED* after 1500. Among these, thirty-six (48.6 per cent) are marked in the dictionary as obsolete (e.g. *apocryphate*, *disple*, *reknowledge*, *trowable*, *well-savouring*), rare (e.g. *ludification*, *manlily*, *purse-master*, *springald*, *ugsomely*) or dialectal, chiefly Scottish or northern (e.g. *agateward*, *ill-willed*, *pig*, *striddling*, *yedder*). A number of words also have a very wide chronological gap between their appearance in *AT* and the second record. To give the most extreme example, *pale-hued*, *prayer saying*, *priest hermit*, *publical*, *stoutherie* and *undoffed* are not recorded again until the nineteenth century. Even from then, attestations are sparse – *publical*, *stoutherie* and *undoffed* are recorded only once – and mostly found in newspapers, magazines or journals, with no discernible relevance to *AT*. The re-emergence of these words after a gap of several centuries may safely be regarded as independent formation or borrowing rather than continuity of use from *AT* with an accidental gap in documentary record (Durkin 2009: 68–73).

All in all, based on the analysis presented in this section, new words in *AT* often have limited demand in *AT* as well as in subsequent work, and except for a few words such as *globe*, *heighten*, *lengthen* and *literature*, they had hardly any lasting effect on the vocabulary of English. They might not have been created at all if *AT* had not been translated. To put it another way, they are likely to have been introduced primarily because they were necessary to render *AN* into English.

3.3 Word-formation patterns

Turning attention now to word-formation patterns, as summarised in Table 3 on the next page, suffixation is the most common way to produce new words in *AT*. Half of the items are nouns, featuring various suffixes of Latinate and native origin, such as *-age*, *-ance*, *-ate*, *-er*, *-erie*, *-ful*, *-ing*, *-ity*, *-ness* and *-ship*. Compounding is almost as frequent as suffixation, and again nouns occupy more than two thirds of the list. Borrowing is the third most common choice, but it is much more restricted than suffixation and compounding. The other patterns such as conversion, prefixation, variant of another form and syncopation are all sporadic, but like suffixation and compounding, they are based on the existing vocabulary. It seems that, in order to create new words, the translator made active use of what was available in contemporary English (even though its elements may have originally come from other languages) and resorted to borrowing when there was no clear alternative. For instance, *abbotship* can easily be derived by adding the native suffix *-ship* to *abbot*, which was borrowed from Latin in early Old English (OE) (*OED* s.v. *abbot* n., etymology), and *bedfellow* combines the two nouns which have also been in use since OE (*OED* s.v. *bed* n., etymology; *fellow* n., etymology). In contrast, *cirographat* is not an everyday word, not even recorded in the *OED*, and an English counterpart could have been difficult to come up with. All the borrowed words occur only once or twice in *AT*, except for *usurary*, which has three tokens in two closely arranged tales (788 and 792).

3.4 Correspondence with Latin: Words with no equivalent

This and the next section will conduct a direct comparison between *AT* and *AN* for the purpose of determining to what extent the new words in *AT* were influenced by the Latin vocabulary in *AN*. Of the 103 new words, thirteen lack an exact equivalent in *AN* (*hereat*, *horn-faste*, *il-faringlie*, *proceed*, *purse-master*, *revestiary*, *scuttleful*, *sow-pap*, *sparrer*, *stout and rout*, *succeeder*, *swine bristle*, *wedman*), and other two do so in one of their occurrences (*professed* and *sorance*). These fifteen words are the focus of this section, and those which have some Latin equivalent in all of their occurrences will be discussed in the next section.

Table 3: Word-formation patterns of new words in *AT*

Pattern	Word	
suffixation	37	*abbotship, abusing, agateward, amorosity, angriness, apocryphate, besprinkle, dashing, deaconship, debatous, deceitfully, disclaundring, familary, foisonable, heighten, il-faringlie, ill-willed, innocentrie, launderer, lengthen, manlily, massage, popeship, privalie, scuttleful, skifting, sluggish, sluggishness, sorance, sparrer, spiteful, stoutherie, striddling, succeeder, trowable, ugsomely, uppermost*
compounding	31	*bedfellow, city gate, Fastingong Eve, hereat, horn-faste, mass clothes, natural fool, o-dead, pale-hued, palm leaf, parsley-bed, pit brae, porch door, prayer saying, priest hermit, purse-master, sacrament-box, sark-skirt, sow-pap, steeple-top, stout and rout, swine bristle, thunderbolt, thyne-forth, unto-come, vanity sight, vine-garth, wedman, well-nurtured, well-savouring, wolf den*
borrowing	18	*assecuten, bafen, benevolous, cirographat, defer, falset, globe, infame, instinction, literature, ludification, maniple, psalmody, publical, revestiary, sumption, tunsion, usurary*
conversion	4	*inlike, practise, proceed, professed*
prefix + suffix	4	*enjugement, undoffed, unseverable, unsoundable*
obscure	3	*Gotham, salfay, springald*
prefixation	3	*becovnand, reknowledge, unbehovable*
variant	2	*pig, yedder*
syncopation	1	*disple*
Total	103	

All the five tokens of *professed* in *AT* are found in the same tale, and four correspond to the Latin noun *prepositus* 'prefect, chief'. The one which has no equivalent is in the middle of these four, so the translator probably needed no exact lexical match in Latin to use the word again. As a mid-fourteenth-century borrowing from French *professor* and Latin *profess-*, *profiteri* (*OED* s.v. *profess* v., etymology), the verb *profess* was already a part of the English vocabulary when *AT* was translated.

(1) *AT*: We rede of a **profeste** of þe ordur of Premonstracence, [...] & þis **profeste** stoppid his hors & haylsid hur honestelie, [...] þis **profeste** þoght he wold prufe þis yong man [...] And þan þe **profest** said agayn; [...] And þan þe **profest** said vnto hym; (289.20–31)[10]
'We read of a professed monk of the order of Premonstratensians [...] and this professed monk stopped his horse and greeted her fittingly, [...] this professed monk thought he would prove this young man [...] and then the professed monk said again; [...] and then the professed monk said to him;'
AN: **Prepositus** quidam Premonstratensis ordinis [...] equum suum retrahendo, officiosissime salutauit. [...] uolens **prepositus** temptare iuuenem [...] subiunxit **prepositus**: [...] Tunc **prepositus** ait: (428.2–11)[11]
'A certain prefect of the order of Premonstratensians [...] drawing back his horse, greeted most courteously. [...] the prefect wishing to tempt a young man [...] the prefect subdued [...] then the prefect said:'

[10] Following the convention in the *MED*, citations from *AT* are referred to by their page and line number in Banks' edition.
[11] Citations from *AN* are indicated by their tale and line number as provided in Brilli's edition.

Sorance lacks a Latin equivalent in one of its two tokens. Unlike *professed*, the examples appear in different tales (81 and 662), and the whole phrase involving the word is missing in *AN*, as in (2a). For the sake of comparison, the instance which has lexical correspondence between *AT* and *AN* is provided in (2b):

(2) (a) *AT*: So afterward þer happend a **surans** for to fall in hys lymbe, þat his fute rotid off. (64.15–16)
'So afterward a sore happened to attack his limb, and his foot rotted off.'
AN: Contingit autem ut putresceret pes eius (83.5–6)
'But it happened that his foot rotted.'
(b) *AT*: ffor þer bysshop had a grete **surans** in his fete, (442.17)
'for their bishop had a great sore in his feet,'
AN: quia episcopus **dolore** pedum laborabat (678.4)
'because the bishop suffered from a pain in his feet'

Surans in (2b) translates *dolore* 'pain, grief' semantically closely. The word is contextually appropriate in (2a) too and is made up of the elements available at the time. Thus, it may not have required significant effort for the translator to use it without any Latin counterpart.

The thirteen words which lack a precise equivalent in *AN* occur only once in *AT*, except for *wedman*, which has two tokens. Although these words have no strict lexical match in *AN*, two of them have some contextual support, as we can see in (3) with *proceed* and (4) with *sparrer*:

(3) *AT*: for if þe law procede for me, be þe sentance of þe law I sall aw þe no thyng, for I ouercom þe. And if þe **procede** be agayns me, I sall aw nothyng be counand, for I am not ouercommen. (28.13–16)
'for if the law rules in favour of me, by the sentence of the law I shall owe you nothing, for I overcome you. And if the verdict is against me, I shall owe nothing by covenant, for I am not overcome.'
AN: Nam si pro me pronuntiatum fuerit, nihil tibi ex sententia debebitur, quia ego uicero. Si autem contra me, nihil debeo ex pacto, quia ego uicero. (38.11–13)
'For if the proposition is for me, nothing will be owed to you from the sentence, because I will have overwhelmed. If it is against me, I owe nothing from the covenant, because I will have overwhelmed.'

(4) *AT*: I am a fend, & I am callid Claudens Aurem, Ere **sparrer**. And I hafe other iij felows, [...] The furst sparis a mans harte, [...] The second sparis his mouthe, [...] & þe thrid sparis his purs, [...] And I my selfe sparis a mans eris, (66.29–67.7)
'I am a fiend, and I am called Claudens Aurem, ear-closer. And I have three other fellows, [...] the first closes a man's heart, [...] the second closes his mouth, [...] and the third closes his purse, [...] and I myself close a man's ears,'
AN: Ego sum demon et uocor Claudens Aurem, et habeo mecum tres socios, [...] Primus claudit cor [...] secundus os [...] tertius bursam [...] (87.4–7)
'I am a fiend, called Ear-Closer, and have three fellows with me, [...] the first one closes a heart [...] the second a mouth [...] the third a purse [...]'

In (3) *proceed* is first used as a verb to translate *fuerit* 'will be' and is converted into a noun in the second sentence as the subject of the conditional clause. The subject and the verb of this conditional clause in *AN* are understood from the first sentence (*pronuntiatum fuerit* 'the proposition will be') and not overtly expressed, which may have led to the use of a new but contextually suitable subject in *AT*. The verb *proceed* was borrowed from French *proceder* and Latin *procedere* in the late fourteenth century – well before the translation of *AT*. *Ere sparrer* in (4) as well as the last clause *And I* [...] *mans eris* is added by the translator. *Sparrer* is clearly modelled on the verb *sparis*, which is recurrent in the citation and renders Latin *claudit* 'shuts, closes'. The verb *sparren* first appeared at the end of the twelfth century, having developed from an OE verb with support of a cognate in Middle Dutch (*OED spar* and *MED sparren*, etymology). Deriving a noun from such a long-established word may have been as straightforward as converting *proceed* into a noun as in (3).

The other eleven words, on the other hand, have no apparent contextual support for their use. Some lack any equivalent even though other words in the same clause have one (e.g. *horn-faste*, *il-faringlie*, *scuttleful*, *stout and rout*, *succeeder*), and sometimes the whole phrase or clause including the new word is added by the translator (e.g. *hereat*, *purse-master*, *revestiary*, *sow-pap*, *swine bristle*, *wedman*). One instance for each scenario is provided in (5) concerning *stout and rout* and (6) concerning *revestiary*:

(5) *AT*: And all þe cetie burn vp **stowte & rowte**, I sall not ouerhypp nor lefe þis mes vndone. (443.8–9)
'If all the city burns up completely, I shall not leave this mass undone.'
AN: Etiam si tota ciuitas concremari deberet, hanc missam non dimittam (678.16–17)
'Even if the entire city has to be burned up, I will not leave this mass'

(6) *AT*: if so wer at þe sacrestan ordand hym suche a stole and a vestement as he saw in hevyn; ffor þan he wold trow at his vision wer trew. And so when he come in-to þe **revestiarie**, & saw þe stole and þe vestiment at was layd furth for þe dekyn, he knew it wele enogh; & þan he was certayn of his vision and [...] (423.23–28)
'if it so happened that the sacristan ordered him such a stole and a vestment as he saw in heaven, for then he would believe that his vision was true. And so when he came into the vestry and saw the stole and the vestment that was laid forth for the deacon, he knew it well enough, and then he was certain of his vision and [...]'
AN: si eiusdem coloris preparatur a sacrista stolam diacono qualem in celo uidisti, uera est uisio. Quod nutu Dei factum, certificatus ergo de uisione, [...] (651.6–8)
'if a stole of the same colour is prepared by a sacristan for the deacon which you saw in heaven, the vision is true. This being done by God's command, confirmed accordingly from the vision, [...]'

In (5) the conditional clause *And all þe cetie burn vp* corresponds to *si tota ciuitas concremari deberet* 'if the entire city must be burned up', but there is no Latin counterpart for *stowte & rowte*. In (6) the whole of *And so when* [...] *it wele enogh* is independently supplied by the translator, and *AN* simply has *Quod nutu Dei factum* 'This being done by God's command'. Among the eleven words which completely lack any kind of equivalent in *AN*, *revestiary* is the only borrowing (Latin *revestiarium* and French *revestearye*), and *stout and rout* is of obscure origin, whereas the other items are all based on the existing vocabulary. Thus, when it comes to employing new words without any counterpart in *AN*, the translator generally resorted to what was current at the time instead of borrowing from other languages. This tendency towards the existing vocabulary also applies to (2a) above and is even seen in (1), (2b), (3) and (4), where some kind of contextual support, if not necessarily the precise counterpart, is available for the new word.

3.5 Correspondence with Latin: Words with an equivalent

Having studied the words which lack a precise Latin equivalent in at least one of their tokens, this section will address those which correspond to a Latin word or phrase in *AN* in all of their occurrences. There are eighty-eight such words, which represent 85.4 per cent of the 103 new words in *AT*. I will classify them by translation patterns, specifically the formal and semantic correspondence between the words in *AT* and their counterparts in *AN*. Careful attention will also be paid to the correlation between these translation patterns and the word-formation patterns taken up in Section 3.3 as well as the etymology of each word.

In accordance with the degree of morphological and semantic proximity to the Latin equivalent, translation patterns of the words in question can be classified into three types, as presented in Table 4 below. In the first type, the Latin word in *AN* and its translation in *AT* share the etymologically identical stem, so the English word essentially counts as a loanword. For example, *familary* translates *familiaris* 'familiar' and its inflected forms in all of its five tokens (see Table 1 above); *abbotship* and *usurary* correspond respectively to (inflected forms of) *abbatia* 'abbey' and *usurarius* 'usurer' in all of their three occurrences; and *literature* is an adoption of *litterature* 'writing' in both of its two examples. *Priest hermit* (*AN heremite*) and *vanity sight* (*AN uanitate*) are exceptional in that only one part of the compound is an etymological translation and the other is an addition by the translator, potentially to clarify or supplement the meaning of the Latin loanword with a native word.

Table 4: Translation patterns of new words in *AT* with an equivalent in *AN*

Pattern	Word	
etymological (loanword)	27	*abbotship, abusing, amorosity, apocryphate, assecuten, benevolous, cirographat, defer, disple, familary, globe, Gotham, infame, innocentrie, instinction, literature, ludification, maniple, massage, popeship, priest hermit, psalmody, publical, sumption, tunsion, usurary, vanity sight*
loan translation	47	*angriness, bafen, bedfellow, besprinkle, city gate, dashing, debatous, deceitfully, disclaundring, falset, Fastingong Eve, heighten, ill-willed, inlike, launderer, lengthen, manlily, mass clothes, natural fool, palm leaf, pig, pit brae, porch door, practise, prayer saying, privalie, reknowledge, sacrament-box, skifting, sluggishness, springald, steeple-top, stoutherie, thunderbolt, thyne-forth, trowable, ugsomely, unbehovable, undoffed, unseverable, unsoundable, unto-come, vine-garth, well-nurtured, well-savouring, wolf den, yedder*
gap in sense or part of speech	14	*agateward, becovnand, deaconship, enjugement, foisonable, o-dead, pale-hued, parsley-bed, salfay, sark-skirt, sluggish, spiteful, striddling, uppermost*
Total	88	

The second type of translation is purely semantic: the Latin word in *AN* is rendered into a word in *AT* which has a different stem but a close meaning and the same part of speech or grammatical function. In short, the resulting English word is a loan translation. *Professed* in (1) and *sorance* in (2b) belong to this type, as they translate a near-synonymous noun *prepositus* 'prefect' and *dolore* 'pain', respectively. Among the words in Table 3, *manlily*, the most frequent of the new words in *AT* (see Table 1 above), translates adverbial *de humanitate* 'by humanity', *fortissime* 'most strongly', *fortiter* 'strongly', *strenuissime* 'most vigorously', *uiriliter* 'manfully' or *uirtute* 'with manliness', which are broadly synonymous with each other. *Stoutherie*, the third most common new word (see Table 1), corresponds to three synonymous Latin nouns (*furtum, latrocinio, rapina* 'robbery'), while *prayer saying* renders the noun *oratione(s)* 'oration' or the gerund *orans* 'praying'. *Yedder* translates a phrase (*plagarum uestigia* 'vestiges of blows', *stigmata plagarum* 'marks of strokes') into a single word. *Palm leaf* is partly an etymological translation as it translates *palmarum foliis* or *foliis palme*, but *leaf* is synonymous with *folium* 'leaf'. Parallel to *priest hermit* and *vanity sight* in etymological translation, *natural fool* and *pit brae* represent partly a loan translation of the Latin equivalent (*stultum* 'fool' and *puteum* 'pit', respectively) and partly an addition by the translator (*natural* and *brae* 'brink', respectively) to expand the meaning of the translation.

The third and the final type of translation involves a gap in either sense or part of speech between the Latin word in *AN* and its translation in *AT*, the two items being also etymologically distinct from each other. Semantically, *deaconship* and *parsley-bed* are not quite close respectively to *gradu lectoris* 'rank of a lector' and *sportella* 'a little basket' in *AN*, though they are both noun phrases. At least, they are not so synonymous as to be called a loan translation. On the other hand, the adjective *sluggish* translates a noun (*pigritiam* 'sloth') or a verb (*accidiareris* 'you would be impaired', *accidior* 'I am impaired'), and the adverb *agateward* corresponds to a noun (*iter* 'journey, passage'), while the core meaning of the Latin word is retained. The past participle *becovnand* condenses a finite clause *ad promissum induxerat* 'he had moved towards a pledge' into one word, and the equivalent of the adverb *o-dead* ranges from a simple verb (*suffocauit* 'choked') to a finite clause (*eius animam excussit* 'sent forth his life', *uitam ibi finiuit* 'ended life there').

As Table 4 shows, loan translation is by far the most common pattern identified and covers a wide range of vocabulary, such as religious terms (e.g. *mass clothes, prayer saying, sacrament-box*), abstract concepts (e.g. *angriness, falset, sluggishness*), objects and places (e.g. *city gate, pig, steeple-top, vine-garth, wolf den*). In addition to these nouns, most of the adjectives illustrate loan translation (e.g. *debatous, inlike, practise, trowable, unseverable, well-savouring*). Translation with a semantic or functional gap does not seem to be particularly common with any specific area of

lexicon. Etymological translation often features words which may well be typical of sermon exempla, such as religious terms (e.g. *abbotship*, *massage*, *psalmody*, *sumption*), abstract notions (e.g. *amorosity*, *benevolous*, *innocentrie*, *ludification*) and professions (e.g. *priest hermit*, *usurary*). These words may not always have had an appropriate counterpart in the contemporary English vocabulary, and etymological translation may have been the most practical option for the translator.

There does not seem to be any strong correlation between word frequency and translation type. Only six words (22.2 per cent) of etymological translation occur twice or more in *AT*, while fifteen words (31.9 per cent) of loan translation and five words (35.7 per cent) with a translation gap do so. After all, as Table 1 showed, new words in *AT* are generally infrequent.

Word-formation patterns of the three translation types and the etymology of each component tell us more about how the translator created each word on the basis of its Latin equivalent. As summarised in Table 5 below, etymological translation is not always equated with simple borrowing, and the translator sometimes made use of the existing patterns and vocabulary in English. Slightly more than half of the twenty-seven words (55.5 per cent) are regarded in the *OED* and the *MED* as borrowing from Latin or French, but suffixation is not uncommon (29.6 per cent). Three words have a native suffix (*abbotship*, *abusing*, *popeship*), illustrating loan blends rather than loanwords (Durkin 2009: 137–139; 2014: 9). As mentioned above, compounds *priest hermit* and *vanity sight* were both created by etymological translation of one element (*hermit* and *vanity*) and addition of an OE word which is absent from *AN* (*priest* and *sight*).[12] The verb *disple* is a syncopation based on *disciplinauit* 'disciplined', and the origin of the place name *Gotham* is unknown.

Table 5: Word-formation patterns of etymologically translated new words in *AT*

Pattern	Word	
borrowing	15	*assecuten*, *benevolous*, *cirographat*, *defer*, *globe*, *infame*, *instinction*, *literature*, *ludification*, *maniple*, *psalmody*, *publical*, *sumption*, *tunsion*, *usurary*
suffixation	8	*abbotship*, *abusing*, *amorosity*, *apocryphate*, *familary*, *innocentrie*, *massage*, *popeship*
compounding	2	*priest hermit*, *vanity sight*
obscure	1	*Gotham*
syncopation	1	*disple*
Total	27	

For its part, Table 6 on the next page demonstrates word-formation patterns of loan translation. In stark contrast to etymological translation, borrowing is one of the least preferred options. Both *bafen* and *falset* come from French, but the French etymons have been around respectively since the thirteenth century and the mid-twelfth century (*Anglo-Norman Dictionary* s.v. *baver* v.intrans., *fauseté* s.), so they are unlikely to have sounded completely novel in fifteenth-century England. Another remarkable distinction from etymological translation is that compounding and suffixation are equally common and together represent the majority of words of loan translation. Nearly half of the compounds correspond to a phrase in *AN* (e.g. *city gate* – *portam ciuitatis* 'gate of a city'; *wolf den* – *antrum lupi* 'wolf's cave'), and the others to a simple noun (e.g. *sacrament box* – *pyxide* 'casket'; *thunderbolt* – *fulmine* 'lightning'). Strikingly, no word in either group consists entirely of Latin or French elements. Ten out of the eighteen compounds have an ultimately Latin or French origin in one of their two parts (e.g. *mass clothes*: Latin + OE; *well-nurtured*: OE + French), but except for *vine-garth* (French + Old Norse), every compound is made up of at least one OE word, and some are entirely native in origin (*steeple-top*, *thunderbolt*, *unto-come*, *wolf den*). Scandinavian elements are seen in the second part of *bedfellow* and *pit brae* and the first part of *Fastingong Eve* and *thyne-forth*, which may be reasonable for a work written in the northern dialect (see Section 1).

[12] *Priest* is ultimately from post-classical Latin *presbyter*, but it has been recorded since early OE (*OED* s.v. *priest* n.).

Table 6: Word-formation patterns of new loan translations in *AT*

Pattern	Word	
compounding	18	*bedfellow, city gate, Fastingong Eve, mass clothes, natural fool, palm leaf, pit brae, porch door, prayer saying, sacrament-box, steeple-top, thunderbolt, thyne-forth, unto-come, vine-garth, well-nurtured, well-savouring, wolf den*
suffixation	17	*angriness, besprinkle, dashing, debatous, deceitfully, disclaundring, heighten, ill-willed, launderer, lengthen, manlily, privalie, skifting, sluggishness, stoutherie, trowable, ugsomely*
prefix + suffix	3	*undoffed, unseverable, unsoundable*
borrowing	2	*bafen, falset*
conversion	2	*inlike, practise*
prefixation	2	*reknowledge, unbehovable*
variant	2	*pig, yedder*
obscure	1	*springald*
Total	47	

Native vocabulary prevails in suffixation too. Only *debatous* (French + Latin) and *stoutherie* (Old Norse + French) are comprised exclusively of non-native elements, and except for these two words, only five have any French stem (*deceitfully, disclaundring, launderer, privalie*) or suffix (*trowable*). *Besprinkle, heighten, lengthen* and *manlily* are purely native. Scandinavian stems stand out more than in compounds: *angriness, dashing, ill-willed, skifting, sluggishness, ugsomely*.

Examples of the other word-formation patterns are scarce, but French or Latin elements are not particularly restricted. Two of the three words which involve both prefixation and suffixation (*unseverable* and *unsoundable*) have a French stem and suffix. As we have seen above, both of the borrowed words (*bafen* and *falset*) are from Old French, the converted adjective *practise* is of Latin origin, and *reknowledge* has a Latin prefix.

As the final step in the analysis of this study, Table 7 shows word-formation patterns of translation with a semantic or functional gap. Suffixation is again predominant, patterns other than compounding are sporadic, and borrowing is not observed at all. In suffixation, only *foisonable* is exclusively of French origin, and the other words are at least partly native, though *deaconship* and *spiteful* have a French or Latin stem. Each of the four compounds also has at least partly native origin, with French elements limited to the first part of the compound *pale-hued* and *parsley-bed*. The prefixed word *becovnand* also has a French stem (*covenant*), and *enjugement* is purely French, but both are rare patterns. Old Norse vocabulary is seen in the stem of *sluggish* and the second part of *sark-skirt*.

Table 7: Word-formation patterns of new words in *AT* translated with a semantic/functional gap

Pattern	Word	
suffixation	7	*agateward, deaconship, foisonable, sluggish, spiteful, striddling, uppermost*
compounding	4	*o-dead, pale-hued, parsley-bed, sark-skirt*
obscure	1	*salfay*
prefixation	1	*becovnand*
prefix + suffix	1	*enjugement*
Total	14	

4 Concluding remarks

This paper has focused on the words which are known to have first appeared in *AT* according to their lexicographical evidence in the *OED* and the *MED* and has discussed their part of speech, semantic field, productivity, transmission to other works, word formation, correspondence with the Latin equivalents in *AN* and translation patterns. The original goal of this study was to examine how the vocabulary choice in *AT* is influenced by the language of *AN* and how the translator accepted the Latin vocabulary for the purpose of his English translation. This section will summarise the discussions in the previous sections and conclude the whole paper.

The 103 new words in *AT* are all content words, most often nouns, and cover a wide range of semantic fields. However, their use was found to be limited in a number of respects. As we saw in Section 3.2, more than 70 per cent of them occur only once in *AT*, more than half are exclusive to *AT* during ME, nearly 30 per cent failed to survive after ME, and almost half of the survivors are now obsolete, rare or dialectal, chiefly Scottish or northern. The productivity of these words is restricted in and out of *AT*, and their creation should be attributed considerably to the unique project of rendering Latin *AN* into English.

Nevertheless, the translator did not simply adopt the Latin equivalents of these words in *AN*. Almost 66 per cent of the new words in *AT* are formed by suffixation or compounding of the lexical elements which were available in contemporary English, and borrowing is much less frequent than either of these two patterns. The vast majority of words correspond to a certain word or expression in *AN*, but only about 30 per cent of them are etymological translations of the Latin counterparts, namely cases where the stem of the Latin word and that of its English translation are etymologically identical. In addition, these etymologically translated words sometimes involve a suffix different from the Latin word, and it can even be a native suffix. These words are also particularly common with topics which may be typical in sermon exempla: religious terms, abstract concepts and professions. In contrast, loan translation, which retains the core meaning of the Latin word but not its stem and which is the most common translation pattern in *AT*, is applied to various semantic fields. Furthermore, loan translation was found to make use of suffixation and compounding based on vocabulary items at the time, with hardly any recourse to borrowing. Besides, no compound of loan translation is purely French or Latin in origin, and native elements predominate in both compounding and suffixation. Suffixation is also most common with translations which have a semantic or functional gap from Latin equivalents, and almost all the words formed by suffixation or compounding have at least partial native etymology.

The degree of Latin influence may also be gauged indirectly by the words which lack a word-for-word correspondence with *AN* (Section 3.4). The translator did not refrain from introducing a new word without any counterpart or support in the context. Most of these unsupported words are composed by the existing vocabulary. The translator also felt free to expand the original (con)text in *AN* and further to introduce a colloquial expression like *stout and rout* of unknown origin.

Fittabile (1957: 4) described *AT* as ‘a faithful, if occasionally inaccurate rendering of the Latin’. It was hypothesised at the beginning of this paper that new words in *AT* are more likely to be Latin-based than the existing vocabulary because the translator must have created them for lack of appropriate English counterparts. Nevertheless, Latin influence proved to be rather limited. Indeed, the majority of these words may be labelled as ‘faithful’ translations in that they are modelled on a certain word or expression in *AN*. However, they are generally nonce, one-off words to begin with, and etymological translation and borrowing from Latin or French are secondary choices, being overwhelmed by loan translation and suffixation or compounding. Latin-based new words tend to be favoured in certain categories such as religion, where native alternatives may not have been readily available. The translator seems to have prioritised words of native origin and current vocabulary which would have sounded familiar to the lay audience. The occasional adoption of Old Norse words may also have been an attempt to this effect, given that *AT* was composed in the northern dialect. The resulting translation is generally faithful to *AN* in terms of content but only restrictively Latinate in vocabulary choice. By choosing this approach of rendering, the translator provided linguistic accessibility and variety for those who did not read Latin or had no access to the original.

References

Anglo-Norman Dictionary, <http://www.anglo-norman.net/>.

Banks, Mary Macleod (ed.). 1904–1905. *An Alphabet of Tales: An English 15th Century Translation of the Alphabetum Narrationum of Etienne de Besançon: From Additional MS. 25,719 of the British Museum*. (EETS o.s. 126–127). London: Oxford University Press.

Brilli, Elisa (ed.). 2015. *Arnoldi Leodiensis Alphabetvm Narrationvm*. (Corpvs Christianorvm, Continuatio Mediaeualis 160; Exempla Medii Aevi 6). Turnhout: Brepols.

Corpus of Middle English Prose and Verse, <https://quod.lib.umich.edu/c/cme/>.

Durkin, Philip. 2009. *The Oxford Guide to Etymology*. Oxford: Oxford University Press.

Durkin, Philip. 2014. *Borrowed Words: A History of Loanwords in English*. Oxford: Oxford University Press.

Fittabile, Leo Frank. 1957. An Introduction, Glossary, and Index for *An Alphabet of Tales*. Unpublished PhD thesis, Boston University.

Johnson, Elma L. 1993. An 'Alphabet of Tales': The Genre, Background, Date, and Provenance of the Text, with an Annotated Glossary. (Volumes I and II). Unpublished PhD thesis, University of Michigan.

Loureiro-Porto, Lucía. 2009. *The Semantic Predecessors of* Need *in the History of English (c750–1710)*. (Publications of the Philological Society 43). Malden, MA: Wiley-Blackwell.

MED = Middle English Dictionary. Ed. Robert E. Lewis, et al. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1952–2001. Online edition in Middle English Compendium. Ed. Frances McSparran, et al.. Ann Arbor: University of Michigan Library, 2000–2018. <http://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/>.

Miura, Ayumi. 2015. *Middle English Verbs of Emotion and Impersonal Constructions: Verb Meaning and Syntax in Diachrony*. (Oxford Studies in the History of English). New York: Oxford University Press.

OED = Oxford English Dictionary. 2000–. 3rd ed. online. Oxford: Oxford University Press. <www.oed.com>.

Saito, Toshio. 1970. Relative pronouns in *An Alphabet of Tales*, a fifteenth century northern text. *Bulletin of Nara University of Education: Cultural and Social Science* 19.1: 31–52.

大正初期における翻訳少女小説の一様相
―エクトール・マロ原作『家なき娘』の初の邦訳をめぐって―

渡辺貴規子

１　はじめに

エクトール・マロ（Hector Malot, 1830-1907）原作、*En famille*(1893)は、『家なき娘』の邦題で知られるフランス児童文学作品である。日本では、同じマロ原作の『家なき子』(原題：*Sans famille*, 1878)とともに知られ、1978 年には *En famille* を原作としたアニメーション作品、「ペリーヌ物語」が「世界名作劇場」シリーズの 1 作としてテレビで放映され人気を博した。

En famille は、主人公の少女、ペリーヌが両親と死別後、会ったことのない父方の祖父が経営する紡績企業で身分を隠して働き、自分で運命を切り開く様子を描いた小説である。日本では 1917 年に「雛燕」のタイトルで初めて翻訳された。翻訳者は『家なき子』の初の邦訳、『家庭小説　未だ見ぬ親』（1903 年）と同じ、五来素川（本名：五来欣造、1875-1944）である。『雛燕』は婦人之友社の少女雑誌『新少女』第 3 巻第 1 号から第 3 巻第 9 号（1917 年 1 月～同年 9 月）に連載され、連載が好評であったため、翌年同社から単行本が上梓された。

明治後期から大正初期の少女雑誌の言説は、良妻賢母主義規範に大きく影響を受けた[1]。その中で、主人公が女子工員、通訳、秘書という職業に就き、困難には自力で立ち向かう、きわめて自立的な少女として描かれたこの小説は、日本の少女読者に向け、どのように翻訳されたのであろうか。そして翻訳において原典からの改変が見られるなら、どのように改変され、どのような主人公像が描かれたのであろうか。本稿の目的は、『雛燕』の翻訳の様相について、描かれる少女像の原典との相違、およびその背景の一端を明らかにすることである。

本稿の構成は、以下の通りである。第 2 節では、原作者エクトール・マロが *En famille* を執筆した意図、原作の梗概、および女子教育の観点から見た場合の特徴について整理する。第 3 節では、「雛燕」が連載された雑誌『新少女』の特徴について、紙上の言説を検討し考察する。第 4 節では翻訳者・五来素川の女性観を検討する。第 5 節、第 6 節において、小説の構成及び本文について、原典と翻訳とを比較し、翻訳の様相について検討する。最後に第 7 節でまとめを付す。

２　原作者エクトール・マロと *En famille*(1893)―女子教育の観点から

エクトール・マロは、1830 年にノルマンディー地方の村ラ・ブイユに、村長かつ公証人の次男として生まれた。1859 年にデビュー作『愛人たち』（*Les Amants*）を公刊し、1896 年の断筆宣言までに 59 作品 65 巻の小説を発表した。作品には写実主義、自然主義の影響が色濃く見られ、政治的には 1848 年の二月革命以降、共和主義、反教権主義の立場を取った。[2]

マロの代表作であり、フランス児童文学の古典的名作でもある『家なき子』は、『教育娯楽雑誌』（*Revue d'éducation et de récréation* , 1864 年創刊）の編集長で、当時のフランス児童文学出版産業を牽引したピエール＝ジュール・エッツェル（Pierre-Jules Hetzel, 1814-1886）からの依頼を契機として執筆された。マロによれば、*Sans famille* は 1878 年の単行本の出版

本稿における原典と翻訳の比較には、次の版を用いた。Hector Malot, *En famille*, (1893), Amiens, Le Goût d'Etre/Encrage, 2006.（以下、この文献の引用時には *EF* という略字で示す。）五来素川、『雛燕』、婦人之友社、1918 年。（以下、この文献の引用時には『雛燕』と示す。）なお、本稿における引用の欧文文献の訳は、すべて拙訳である。日本語文献を引用する際には、可能な限り旧字体を新字体に書き改め、ルビは適宜省略した。

[1] たとえば明治時代後期に創刊された代表的な少女雑誌、『少女世界』（博文館、1906 年創刊）は、明治期の女子教育に基づく修養、修身、手芸、読物など良妻賢母的な内容であったとされる。また、『少女界』（金港堂、1901 年創刊）にも、女子は将来家内で男子を支える役割があるという教えがしばしば繰り返された。（Cf. 日本児童文学学会編『児童文学事典』、東京書籍、1988 年、379 頁。渡辺貴規子「明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ･ダルクの伝記―ヒロイン像の変容をめぐって」『言語文化の比較と交流』9 号、2022 年、1-10 頁。）

[2] 渡辺貴規子『『家なき子』の原典と初期邦訳の文化社会史的研究』、風間書房、2018 年、10-20 頁。

以降、翌年末までにすでに 17 版を重ね、続編を書いてほしいという依頼も後を絶たなかった。そして 15 年後にようやく「対（le pendant）」となる作品として *En famille* を出版した。[3]

Sans famille が男児を主人公としたのに対し、*En famille* の主人公は女児である。これにはマロの私生活との関わりが深いと推定されている。マロは 1868 年に生まれた一人娘のリュシーを大変かわいがり、『家なき子』は彼女に捧げた。そして 1893 年、*En famille* の出版と同年にはリュシーが女児を産んだ。孫娘の名前はペリーヌ、*En famille* の主人公と同じ名前である。マロは、孫娘の教育に熱心であり、2019 年には、ペリーヌの成長観察記録「ペリーヌ手帳（Carnet Perrine)」が活字化されている[4]。成長を熱心に見守った孫娘と、同じ名前を持つ少女が主人公である小説、*En famille* には、マロの女子教育観が反映されたと考えられる。

マロは小説の中でしばしば児童教育のテーマを扱った。たとえば『家なき子』には、当時、フランス共和国議会においてまさに議論されていた、新しい共和主義的初等教育の内容が含まれた[5]。しかし *En famille* にはむしろ、学校教育に縛られない独自の教育が描かれた。もともとマロが知育偏重型の学校教育を疑問視したのに加え、主人公が十代前半の少女であることとも関係が深いと考えられる。複数の小説の分析を通し、マロの女子教育観を考察したギュイユメット・ティゾンによると、マロは、標準的な女子中等教育機関であった修道院と寄宿舎における教育を有害なものと見なし、その代わりに、「自然とのふれあいや、熱心な両親のおかげで個々の美点を伸ばす」教育を自立的な女性を育てる教育として評価した[6]。

事実、*En famille* においても、両親からの遺言や教訓に導かれ、様々な困難を乗り越える主人公の姿、そして戸外での生活の中でまるでロビンソン・クルーソーのように、自然にあるものだけで生活を整え、創造性を発揮する様子が描かれている。後者は、ヨーロッパ児童文学における「ロビンソナード[7]」の系譜に連なる場面として、小説の重要な特徴の一つを成している。マロは自身の創作に関する回想録『私の小説の物語』（*Le Roman de mes romans*, 1896）で、*En famille* に関し次のように述べた。

> 何度も、鉄道で私はソム県の谷をたどった。そして車両の窓から私はこれらの泥炭地を見た。しかし、車両の中から観察したって何になろう？私が谷の深い切込みの何たるかを学び、この小説の女主人公のアイディアを含む全体構想を得たのは、その草原を歩いている時のことであった。（…）実は私が追求したかったのは物語の筋というよりも、ある観念の発展であった。（…）*En famille* を導いた最も重要なもの、それは意志の研究である。私が適用したかったもの、それは、ある人格の中に意志が育成されること、意志の働き、意志が成し遂げる奇蹟である。(…)ありのままの厳しい自然の中を歩き、私にはすぐに、泥炭地の中にある島で孤立している、意志の力を備えた女の子を完成させうるものが見えた。そして意志の力による絶え間ない努力以外に何の支えもなく、そこで彼女がどう生きたのかということが分かった。[8]

---

[3] Hector Malot, *Le Roman de mes romans*, Flammarion, 1896, réédité dans les *Cahiers Robinson*, n° 13, Presses de l'Université d'Artois, 2003, p.99, 188-189.

[4] Hector Malot, « Carnet Perrine »(1893-1900), *Cahiers Robinson*, No.45, 2019, p.63-70.

[5] 渡辺貴規子、前掲書、42-141 頁。

[6] Guillemette Tison, « L'éducation des filles dans les romans d'Hector Malot », *Cahiers Robinson*, No.45, 2019, p.37-46.

[7] フランシス・マルコワンの定義では、「ロビンソンナード」は、ヨアヒム・ハインリヒ・カンペ『若者たちのロビンソン』（Joachim Heinrich Campe, *Robinson der Jüngere*, 1779）、ヨハン・ダヴィッド・ウィース『スイスのロビンソン』（Johann David Wyss, *Der Schweizerische Robinson*, 1813）をはじめ、『ロビンソン・クルーソー』に着想を得て書かれたヨーロッパ文学の一連の作品群を指す。フランスでは 1840 年から 1875 年までに 43 作品を数え、マロの作品では児童文学作品『ロマン・カルブリス』（*Romain Kalbris*, 1867/1869）、『家なき娘』の中に「ロビンソナード」のエピソードが見いだされる。（Cf. Francis Marcoin, *Librairie de jeunesse et littérature industrielle au XIXe siècle*, Paris, Honoré Champion, 2006, p.83-92. Yves Pincet, « Variation sur le thème de Robinson dans l'œuvre romanesque d'Hector Malot », in *Cahiers pour la littérature populaire*, La Seyne-sur-Mer, Centre pour l'étude sur la littérature populaire, 1996, p.75-86.）

[8] Hector Malot, *op.cit.*, *Le Roman de mes romans*, p.191-192.

このように、マロは小説の主題に「意志の研究」を据えたと述べた。そして小説の着想を得たのは、小説の舞台であり、上述した「ロビンソナード」が展開するフランス北部ソム県の泥炭地を、作家自身が歩いた時だったと述べられる。この引用から、主人公の少女が「意志の力による絶え間ない努力以外に何の支えもな」い状態でいかに生き抜くか、ということに描写の重点が置かれたと判明する。

小説の中で主人公が受ける過酷な試練は主に三つある。第一に、父親と母親の相次ぐ死、そして孤児となる経験である。第二に、母親と死別したパリから、フランス北部ソム県の架空の都市で、父方の祖父が紡績企業を経営するマロクールまで、嵐や飢えに襲われ瀕死の状態に陥りつつ、一人で歩いて旅をする経験である。これは身体的にも、精神的にも、物語の中で最も過酷なエピソードの一つである。主人公は「お父さんは何度も言ったじゃないか、危険の中で助かるチャンスは最後まで戦う者にあるのだ、と[9]」と父親の教えを胸に何とか乗り越えようとする。しかし一時は道中で死を覚悟する様子さえも書かれている[10]。第三に、マロクールに到着後、祖父が経営する紡績企業で、素性を明かさぬまま女子工員、通訳、秘書として働き、その中で会社の経営権をめぐる陰謀に巻き込まれる経験である。主人公は身の処し方を考え、結末で祖父に自分が孫娘であることを告白し、家族としての再会を果たす。同時に祖父の後継者として、劣悪な労働環境で苦しむ従業員の救済を開始するのである。

こうした三つの試練に加え、先述した「ロビンソナード」のエピソードがある。女子工員たちが集団で寝泊まりする部屋の息苦しさに耐えかねた主人公が、泥炭掘の狩猟小屋で創意工夫して衣食住をまかない、生活するというものである。主人公は、実生活で遭遇する困難を克服し、たった一人で創意工夫を重ね自然の中で生活することで、意志を鍛錬し、自発的に考え、行動できる人間へと成長する。同時に結末では、紡績企業の後継者として、従業員の幸福のために行動する頼もしい経営者になる。自分の才能を活かし、成功する少女を描くこの小説は、大正初期の少女雑誌の中でどのように紹介されたのであろうか。

３　「雛燕」の掲載誌『新少女』について

本稿第 3 節と第 4 節では、『新少女』と翻訳者・五来素川の女性観を確認する。興味深いことに、両者は逆の方向性を持ち、翻訳にも関係したと考えられる。

『新少女』は羽仁もと子(1873-1957)が創立した婦人之友社から、雑誌『子供之友』（1914 年創刊）の姉妹誌として 1915 年 4 月に創刊された少女雑誌である。羽仁もと子は青森県八戸市に生まれ、巌本善治が校長の明治女学校に学んだ後、地元で最初の結婚をするも間もなく離縁した。1897 年に再度上京し、報知新聞社に入社、1899 年には記者となった。いわゆる「職業婦人」の先駆的存在であり、日本で初めての女性新聞記者であるとも言われる。1901 年に同僚であった羽仁吉一と再婚、その後二人で婦人之友社を設立した。家庭生活の合理化を唱えた思想家、そして自由学園の創立者としても知られる。[11]

『新少女』は、絵画部門主任として竹久夢二を迎えたことで知られるものの、この少女雑誌に関する先行研究はわずかしかない[12]。『新少女』はどのような雑誌であり、紙面においてどのような少女が理想とされたのであろうか。たとえば創刊号の編集後記には、「新少女」という雑誌名が編集者たちの「めいめいの新しい望み」を表し、「その進歩的なることに於

---

[9] *EF*, p.73.

[10] 次のように書かれた。「いいわ、死にましょう。もう抵抗することも、これ以上戦うこともする必要はない。戦いたくても、もう出来ないもの。お父さんも死んだ、お母さんも死んだ。今度は私の番。そして、うつろな頭をよぎった考えの中で、最も残酷だったのは、こんなふうにみじめな獣のように溝の中で死ぬのなら、父や母と一緒に死ねたら良かったのに、という思いだった。」（*EF*, p.81-82. 拙訳）

[11]『羽仁もと子著作集第 14 巻　半生を語る』、婦人之友社、1981 年。斎藤道子『羽仁もと子　生涯と思想』、ドメス出版、1988 年。西村絢子「羽仁もと子の教育論―女子教育観と生活主義教育の系譜について」『教育学研究』、40 巻 3 号、1973 年、242-250 頁。葛井義憲「羽仁もと子、吉一論―家庭と子どもと婦人」『大正デモクラシー・天皇制・キリスト教』、新教出版社、217-251 頁。

[12] 小嶋洋子「竹久夢二と少女文化―『新少女』投稿画評と投稿画の変遷」『大正イマジュリィ』、No.6, 2010 年、82-97 頁。小嶋洋子「『新少女』における夢二と少女とキリスト教」『美学研究』、26 号、2011 年、27-42 頁。

て、その面白味の沢山なることに於て、真実に皆様の楽しき友達の一人でありたいと思ひます」と、「進歩的」かつ「面白味」の多い紙面を目指すという抱負が示された[13]。

翌年には「新しい女」という語について、次の引用の記事が掲載された。「新しい女」とは 1913 年に平塚らいてう（1886-1971）が『中央公論』誌上で「自分は新しい女である」と公言し、流行語となった言葉である。明治末期から大正期にかけて、良妻賢母主義批判の言説として、社会主義者による「良妻賢母」批判とともに「新しい女」の言説が現れていた[14]。実際に、良妻賢母主義の抑圧を乗り越えて自己主張し、多分野の職業で活躍した女性たちが新聞記事で伝えられてもいた[15]。

> 「新しい女」といふのは近頃の流行言葉ですから、皆さんの中には小耳にはさんでゐる方もあるでせう。流行言葉に余り深い意味のないもので、私などから見ると皆さんは凡て新しい少女です。（…）苟も人間として生きて行く以上は、凡てが新しい人間です。新しい人間でなくてはなりません。わざわざ「新しい女」と女にだけさういふのは、世間狭い人たちが面白半分の好奇心から出た流行言葉で、永く「新しい女」などいふ言葉が行はれるとも思はれません。皆さんはさういふ言葉があるからと云つて、何か一種別のもののやうに考へる必要は少しもありません[16]。

「新しい女」という語が「世間狭い人たち」の「面白半分の好奇心」から出ており、自我に目覚めた女性たちへの揶揄や批判を含む点に苦言が呈された[17]。『新少女』では、「新しい女」は「新しい人間」のひとつと捉えられ、「何か一種別のもののやうに考へる必要は少しもありません」と、男女の別なく普遍的な存在と見なされている。同時に読者全員が「新しい少女」であると書かれてもいる。これからの時代を生きる「新しい少女」が読む「進歩的」な雑誌となることが編集方針であったと言える。

ここで、『新少女』の記事から判明した、雑誌の「進歩的」な側面について三点に整理する。第一に、読者が自分の頭で考え、自分のことは自分で決め、主体的に行動することを説いた。たとえば、創刊号に掲載された羽仁もと子による「新少女伝」には、「めいめいに子供の時から、よく気をつけて、自分のことは自分でするやうに、またよく考へて、自分の道は自分で歩む様にしなければなりません。[18]」という教えが付された。さらに同年の羽仁の論説では、以下の記述がある。

> 併し私は（…）父母のいひつけを守らう守らうとばかり思つてゐる少女を、上の上の少女だとは思つてゐません。といふのは私は少女といふものは、いつでも親や先生の仰る通りにならなくても良いものだと思つてゐるからで御座います。（…）人といふものは生れた時から、一生懸命に自分で自分を護り育てて行かなければならないやうに出来てゐるのです。（…）あなた方の体や心を、本当に護り、養ひ育てて行く人は、あなた方自身の外にはありません。[19]

---

[13] 「雑司ヶ谷より」『新少女』第 1 巻第 1 号、1915 年 4 月、119 頁。

[14] 牟田和恵『戦略としての家族』、新曜社、1996 年、119-120 頁。社会主義者や「新しい女」の言説における良妻賢母主義批判、および良妻賢母主義擁護論については、深谷昌志の分析を参照した。（Cf. 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』、黎明書房、1966 年、228-237、251-267 頁。）

[15] 『東京朝日新聞』の連載「東京の女」シリーズ（1909 年 8 月 29 日—同年 10 月 22 日）、『読売新聞』の連載「新しい女」シリーズ（1912 年 5 月 5 日—同年 6 月 13 日）がそういった記事に当たる。（Cf.佐伯順子『明治〈美人〉論』NHK 出版、2012 年、172-195 頁）

[16] 「新しい女と言ふ語」『新少女』第 2 巻第 12 号、1916 年 12 月、104-105 頁。

[17] もともとは、英語の”New Woman”の正式な訳語「新婦人」があった。しかしそこから派生した「新しい女」という語の方が、「新婦人」と比較して、社会や男性たちからの非難と悪罵の要素が込められた。（Cf. 堀場清子『青鞜の時代—平塚らいてうと新しい女たち』、岩波新書、1988 年、176-181 頁。）

[18] 羽仁もと子「新少女伝　八百屋お七」『新少女』第 1 巻第 1 号、1915 年 4 月、11 頁。

[19] 羽仁もと子「少女はどうしても親や先生の仰有る通りになければならないものでせうか」『新少女』第 1 巻第 9 号、1915 年 12 月、27-29 頁。

このように、羽仁は創刊当初から、自分のことは自分で考え、決め、生きることを説いた。「父母のいひつけ」さえも盲目的に従ってはならず、「あなた方の体や心を、本当に護り、養ひ育てて行く人は、あなた方自身の外にはありません」と、自分の身体、心、人生はあくまで自分自身のものであるという教えが看取できる。

第二に、少女読者たちが身体を丈夫にし、体を積極的に動かすことを推奨した。1916 年には『新少女』運動部も作られ、その紹介記事には次のように述べられた。

> 私どもはまづ第一に身体が丈夫でなくてはなりません。身体が弱くつては力いつぱい勉強することも出来なければ、愉快に遊ぶことも出来ません。大きくなつて、立派な母親になつて、子供を育ててゆくことも出来なければ、進んで世の中のために有用な働きをすることも出来ません。[20]

身体を丈夫にする目的は「立派な母親になつて、子供を育ててゆく」ことだけでなく、「進んで世の中のために有用な働きをする」ことであるとされた。この背景には、読者の中に女学生のみならず、働く若い女性もいたことも挙げられる。『新少女』の読者投稿欄では、女中や奉公人として働く少女読者からの投稿、彼女たちを励ます編集者の言葉が見られる。また、時には男子のように活動的でも良いとされた。イギリスの上流階級出身の少女たちが乗馬・狩猟に行くことを紹介した記事では「優しげな貴婦人、花のやうな令嬢たちが、障害物やら柵やらを、物の数ともせずに乗り越えて、同行の男子をして顔色ならしめることも、決して珍らしくはないと申します[21]」と述べられた。

第三に西洋文化を積極的に紹介した。ヨーロッパの少女の生活や文化の紹介、ディケンズの『ニコラス・ニクルビー』（*Nicholas Nickleby*, 1838-1839）の翻訳、ヨーロッパの偉人伝の連載など、毎号のようにヨーロッパに関連する記事が掲載され、「雛燕」も第三巻の目玉となる連載として、次のように紹介された。

> 『新少女』も愈々三年目のお正月を迎へることになりました。（…）『まだ見ぬ親』の訳者として名高い五来先生が、仏蘭西の面白い小説を、新年号から続きものにして皆さんのために書いてくださいます。キツト大評判になることでせう。（…）ますます好い材料を選んで、本誌が少女雑誌中の最もはつきりした良雑誌であるといふ世評に背かないやうにいたします。[22]

以上のように、『新少女』は、*En famille* の翻訳が発表される場としては、比較的適した雑誌であったと言える。*En famille* の主人公が、両親の死後、自分自身の判断で行動する少女であった点、一人で旅をし、工場で工員や通訳として働く活動的な人物であった点では、『新少女』における「新しい少女」像とペリーヌ像は合致する部分が多い。そしてこの小説がフランスで発表された比較的新しい作品であった点も、西洋文化を積極的に紹介した『新少女』にとっては好ましかったであろう。後述するように、『雛燕』では *En famille* のあらすじは尊重されて翻訳され、雑誌にとって読者を惹きつける重要な連載であったのである[23]。

４　翻訳者・五来素川の女性観

まず、五来素川の経歴を『雛燕』を翻訳するまでを中心に述べる。茨城県の士族出身の五来は、弁護士、ジャーナリスト、文筆家、早稲田大学教授と、多方面で活躍した。東京帝国大学法科大学仏法学科を卒業し、フランス語は青年時代からきわめて堪能であった。したがって、*En famille* の翻訳もフランス語の原典から直接なされたと考えられる。1902 年に読売

---

[20] 「『新少女』運動部の新設」『新少女』第 2 巻第 2 号、1916 年 2 月、34 頁。

[21] 「馬に乗つて狩猟にゆく西洋の少女」『新少女』第 1 巻第 1 号、1915 年 4 月、63 頁。

[22] 「新年号予告」『新少女』第 2 巻第 12 号、1916 年 12 月、102-103 頁。

[23] たとえば、読者投稿欄で次のようなやり取りが見いだされる。「『雛燕』はほんとに面白い小説でございましたね、五来先生に御礼申し上げます、記者さま何うぞあれを一冊の本にしてお出し下さい。（みつ子）/ 「雛燕」はきれいな一冊の書物にして本社から出版するつもりです。（記者）」（「読者だより」『新少女』第 3 巻第 10 号、1917 年 10 月、38 頁。）

新聞社に入社し、マロ原作『家なき子』の翻案の連載が人気となった。1904 年、読売新聞特派員として渡仏、ベルリン在住を経て 1914 年春に帰国した。帰国後、『大帝那翁』（1914 年）、『仏蘭西及仏蘭西人』（1915 年）などフランス文化・歴史を紹介する書籍を出版し、1916 年にはフランス政府の後援を受けアルベール・メーボンが創刊した雑誌『極東時報』の編集長に就任した[24]。劇作家エドモン・ロスタン（Edmond Rostand,1868-1918）が亡くなった際には、戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』(原題：*Cyrano de Bergerac*, 1897)の翻案「白野十郎」を『極東時報』に連載した[25]。

五来が *En famille* を翻訳したのは、彼が『家なき子』をすでに翻訳していたことが影響したと推測される。約 10 年間のヨーロッパ生活の中で *En famille* の原典が見出された可能性も大きい。1910 年代は五来が日仏交流の促進に努めた時期であるため、『新少女』への連載の依頼を受け、少女が主人公のこのフランスの小説を選んだのは自然であったかもしれない。

しかしながら、『新少女』の方針とは異なり、五来は保守的な女性観の持ち主であったと考えられる。五来の女性観が看取できる文章は少ない。しかしその中で、『雛燕』の出版と近い時期には、次の記事が見いだされる。

> 家族主義の社会では、結婚は全く子供を得て家を継続して行く為めで、決して夫婦の幸福の為めではない。従つて結婚は家と家とがするので、当人同士がするのでない。(…)新道徳の見地から云へば、夫婦の幸福の為め舅姑は別居すべきであるが、然し他に一の理由があつて、之が実行を難じさせるものがある。それは老父母扶養の義務である。(…)是は美風である。（…）現今の急務は、一方には嫁が犠牲となつて舅姑と同居し、他方には舅姑が嫁を虐待せぬ様にしたい。[26]

五来は『未だ見ぬ親』を翻訳した頃から、日本の家族のあり方を旧来の家族主義と、新しい個人主義の二項対立として捉え、家族主義において子が親を、弟が兄を、妻が夫を敬い従う慣習、犠牲的精神を美徳と考えていた[27]。引用は、舅と姑が夫婦と同居すべきと主張したものである。新道徳、つまり個人主義の考え方では別居すべきとされるが、日本には子が親を扶養するという義務、美しい習慣があるので「嫁が犠牲となつて舅姑と同居」すべきであると結論づける。また五来は、家庭では妻・母が中心となるべきであると次の文で主張する。

> 私の家庭には本年五歳の和夫といふのがおります。（…）「坊ちやんはお父様とお母様が好き、ミッコチャン（長女光子三歳）は婆やとお母様が好き、サーチヤン（次女幸子当歳）は姉やとお母様が好き、お父様は子供達とお母様が好き、皆んながお母様が好きなんだわねー」と云ふのです。彼れの小さき脳に映る家庭観は母が中心であると云ふことなのです。そして母は愛情の発光点であり、愛の絆を以て家族全体を結び付けて、自分の周囲に集中さして居ると云ふのです。そして其愛の絆は亦は愛の鉄槌となり、子供の性格を鍛えて居るのです。是は新しい家庭にも旧い家庭にも変らない真理です。[28]

自らの家庭での息子の「皆んながお母様が好き」という言葉を例に挙げ、妻・母が「愛情の発光点であり、愛の絆を以て家族全体を結び付け」るということが「新しい家庭にも旧い家庭にも変らない真理」であると一般化、普遍化して述べている。さらに 1930 年代には、夫婦のあり方を説いた、次の五来の文章が見出される。

---

[24] 岸川俊太郎「『極東時報』という〈日仏交流〉—『極東時報』総目次の公開にあたって」『リテラシー史研究』3 号、2010 年、55-62 頁。岸川俊太郎「もうひとつの『ふらんす物語』—アルベール・メーボン社長兼主筆『極東時報』から永井荷風まで」『比較文学年誌』、46 号、2010 年、120-135 頁。

[25] 五来素川「劇詩家ロスタン死す」『極東時報』第 81 号、1918 年 12 月、32-35 頁。ロスタン作、素川訳「史劇　白野十郎（シラノ・ド・ベルデュラツク）」、『極東時報』、第 81 号・第 83 号・第 85 号（連載）、1918 年 12 月～1919 年 2 月。

[26] 五来素川「舅姑別居の可否得失」『婦人之友』10 巻 5 号、1916 年 5 月、28-29 頁。

[27] 五来欣造「家族制度ト個人制度トノ得失」『法学士林』3 巻 21 号、1901 年 7 月、43-56 頁。渡辺貴規子、前掲書、「五来素川の家族観—『家族主義』から『個人主義』へ」、298-302 頁。

[28] 五来素川「新時代の家庭におくる言葉」『婦人之友』18 巻 2 号、1924 年 2 月、44 頁。

私は、夫婦といふものは、月並な言方ではあるが、日と月のやうなものであると思つてゐる。夫は太陽の如くその光によつてすべて自分の周囲にあるものを、幸福にせねばやまないといふ温情を持つべきである。（…）妻は月であらねばならぬ。月は日の光を反映して始めて輝く。彼女の使命はその柔い光を以て自己の四面を美化することにある。（…）月は日の光を反映して始めて輝く。従つて月の光は日の光の反射に過ぎない。（…）月は日の光によつて始めて輝く。月は自分の光を自分から出るものと考へてはならぬ。自分の容貌や自分の才知によつて自分が輝くものと考へてはならぬ。婦人には謙譲の美徳が最も大切である。[29]

女性は家庭でこそ、妻、母として本領を発揮できるという、良妻賢母主義に則った考え方を五来が持っていたと判明する。最後の引用では、夫を太陽に、妻を月にたとえ、「月は日の光を反映して始めて輝く」と繰り返し、「自分の才知によって自分が輝くものと考えてはならぬ」と、女性が自らの能力を活かして生きることを否定する文さえ見られる。保守的な女性観を持つ五来は、*En famille* を読み、主人公が主体的に能力を発揮して道を切り開く姿をどのように捉えたのであろうか。実際のところ、原作者マロが「意志の研究」という主題を意識して執筆したと考えられる箇所は、次節から見るように大幅に改変されたのである。

５　原典と翻訳の構成の比較

本章では、単行本の『雛燕』と原典の章の構成を比較し、翻訳の様相の特徴を探る。原典の *En famille* は 40 章で構成される。それを『雛燕』では 24 章に分けて翻訳された。原典の第 1 章から第 5 章では、主人公と病気の母親がパリに到着してから、母親と死別するまでが書かれた。第 6 章から第 10 章には、パリからマロクールへの主人公の一人旅が描かれ、第 11 章から第 17 章で、主人公が実の祖父が経営する紡績企業で身分を隠して女子工員として働くエピソードが展開した。第 18 章から第 22 章において、インド育ちの主人公が英語運用能力を活かして通訳として働きはじめ、「ロビンソナード」のエピソードも見受けられる。第 23 章から第 30 章に、通訳として働く中で判明する、企業の経営権をめぐる陰謀が描かれる。第 31 章から第 40 章では、経営者（祖父）の秘書となった主人公の生活、主人公の祖父と主人公の両親が絶縁状態となった経緯、従業員たちの労働環境改善計画などが書かれた上で、結末で主人公は自らの素性を明かし、祖父と家族としての再会を果たすとともに、後継者として企業改革を実現していく。

原典の 40 章の中で、第 7 章から第 9 章、第 13 章、第 15 章、第 17 章、第 19 章から第 22 章、第 35 章の 11 章が省略され、残りの 29 章が『雛燕』において翻訳された。五来は、『家庭小説　未だ見ぬ親』の翻訳でも、原典の『家なき子』の 44 章のうち 17 章を省略し、筋がつながらない部分には自ら創作を加え、あらすじを変えた[30]。一方『雛燕』では、章構成は改変されたものの、省略された章で起こる出来事の経緯の説明だけは、前後の章の翻訳に加えられ、あらすじが尊重された。

省略された第 7 章から第 9 章は、主人公が瀕死の経験をしながら、一人で歩いてパリからマロクールまで旅をする場面である。したがって、主人公が嵐や飢えに襲われた極限の状況の中で、自らを奮い立たせる場面、死を覚悟する場面は削除された。さらに翻訳では、主人公の徒歩での旅は、汽車の旅に改変された。パリからマロクールへの移動は、翻訳ではわずか 6 行で表現され[31]、汽車から降りた後で街をさまよい、「飢ゑと疲れで、力の尽き果てた」（『雛燕』、94 頁）様子が描かれたのみである。

次に、原典の第 15 章、および第 19 章から第 22 章は、「ロビンソナード」のエピソード、つまり主人公が泥炭掘の狩猟小屋で自給自足の生活を送るエピソードに割かれた。本稿第 2 章で言及したように、主人公が一人で創意工夫を重ねて生活を送るこのエピソードは、小説の主題が「意志の研究」であることを考えた場合、大変重要な章である。しかし『雛燕』で

[29] 五来素川「日と月」『動乱の静観』東宛書房、1937 年、12-13 頁。
[30] 渡辺貴規子、前掲書、302-311 頁。
[31] 『雛燕』、91 頁 8 行目（後ろから 3 行目）～92 頁 3 行目。

は翻訳の対象にはならなかった。

原典の第 13 章は、主人公がマロクールの風景を観察する場面であり、風景描写が章の大半を占めるため、あらすじには直接関係がないと見なされ省略されたと考えられる。原典第 17 章は、主人公の友人の女子工員が機械で指を切断するエピソードが書かれ、第 35 章には、主人公の両親と実の祖父である紡績企業経営者との不和について記述された。主人公の祖父が、息子夫婦（主人公の両親）を罵る言葉も含む場面である。残酷な場面や、親子間の不和を描く場面も削除された。

このような、原典と翻訳との章の構成の相違から、とくに二点を指摘したい。第一に、主人公がどのような少女として描かれたかという点に着目した場合、原典から翻訳へ、大変重要な改変がなされた。つまり、主人公の徒歩での一人旅が、汽車の旅に改変された点、「ロビンソナード」のエピソードが削除された点である。改変の理由として、少女にあまりにも過酷な経験をさせないよう配慮されたことが、まずは考えられるだろう。しかし同時に、「意志の研究」という原作の主題を五来が理解せず、不要であるとみなしたこともうかがえる。

第二に、親子間の不和のエピソードの削除が、『家庭小説　未だ見ぬ親』と同様に行われた。五来は『家庭小説　未だ見ぬ親』において、主人公と親代わりの場面や親子間の情愛を重点的に、比較的丁寧に訳したのに対し、子が親を悪く言う言葉や、親子間の不和の場面は翻訳しなかった[32]。同様の翻訳方法は『雛燕』でも取られている。原典の前半部、とくに第 1 章から第 6 章までの主人公がパリで最愛の母親と死別するまでは、表現の省略が少なく、原典 1 章につき翻訳 2 章分が当てられる場合もあるなど[33]、比較的丁寧に訳されている。それに対し、後半部は原典の 2 章分を翻訳の 1 章分に収めるよう短縮される場合も見られる[34]。その結果、翻訳では職業小説としての側面は後景に退き、家族の物語としての側面が強まった。

物語の後半部における、主人公の女子工員、通訳としての働き、企業内の陰謀、労働環境の改善というあらすじは、尊重された。しかし細部は捨象され、まるでダイジェストのように翻訳がなされた。主人公は働く少女として書かれ、結末では幸福を手にすることは原典と翻訳に変わりはない。しかし、その過程で彼女がいかに考え、判断し、行動したのか、そして原作者が「意志の研究」という主題を意識して執筆した文言について、翻訳では限定的な形でしか表現されていない。この点について次章で数例の具体例を見たい。

６　翻訳の実際

まず、原典第 4 章における、主人公の母親が主人公に残す遺言を検討したい。引用内の一番上が原典の文、次に筆者による訳、最後に『雛燕』の訳文を示す。

> - C’est cela, oui, c’est cela : tu arrives à Maraucourt ; ne brusque rien ; tu n’as le droit de rien réclamer, ce que tu obtiendras ce sera par toi-même, par toi seule, en étant bonne, en te faisant aimer... il est impossible qu’on ne t’aime pas... Alors, tes malheurs seront finis.（*EF*, p.54）
> 「そうよ、そのことよ。お前はマロクールに着く。決して急いではいけないよ。お前には何も要求する権利はないの。お前が得るものはお前自身の力で得なくてはいけないよ。自分一人の力で。善良でいることで、愛されることで。お前が愛されないなどということはあり得ないわ。そうすれば、お前の不幸も終わる。」(拙訳)
>
> 「あゝ左様々々…お前が宮古へ行つて…けれど焦慮（あせ）つてはいけません…お前の方から本名を名乗る前に、たゞお前は皆様の気に入るやうによく勤めて、さうして後で名乗つて、お前がお世話になるやうにしなければいけません…お前のために勤めるので

[32] 渡辺貴規子、前掲書、307-311 頁。

[33] たとえば、原典の第 4 章は『雛燕』では「引越」と「馬市場」という章題の二つの章に翻訳された。

[34] たとえば、原典の第 23 章と第 24 章は『雛燕』では「意外なお手柄」という章題の一つの章にまとめられて翻訳された。同様に、原典第 28 章、第 29 章は「泥酔者の代り」、第 30 章と第 31 章は「秘密の手紙」、第 33 章と第 34 章は「女先生」、第 39 章と第 40 章は「大団円」という章題の 1 つの章に、それぞれまとめられ翻訳された。

すから、ね…解りましたか…お前は皆様の気に入るやうに出来るでせう。花枝のやうな児が…人様の気に入らないことが…ありはしません。…さうさへ成れば...もうお前の困ることはないでせう」（『雛燕』、84-85 頁。下線は引用者による。）

原文において「お前が得るものはおまえ自身の力で得なくてはいけないよ、自分一人の力で」と説かれる場面で、翻訳では「お前の方から本名を名乗る前に、ただお前は皆様の気に入る様によく勤めて」と改変された。原典では、「お前自身の力」「自分一人の力」と主人公自身の能力が重視されるのに対し、翻訳では「皆様の気に入る様に」と、他者から好かれることの大切さが繰り返される。次の引用は、主人公の家庭教師の女性が、主人公の作文を賞賛する言葉である。

Je lui ai demandé une petite narration sur Maraucourt; en vingt lignes, ou cent lignes, me dire ce qu'était le pays, comment elle le voyait. En moins d'une heure, au courant de la plume, sans chercher ses mots, elle m'a écrit quatre grandes pages vraiment extraordinaires: tout s'y trouve réuni, le village lui-même, les usines, le paysage général, l'ensemble aussi bien que le détail; il y a une page sur les entailles avec leur végétation, leurs oiseaux et leurs poissons, leur aspect dans les vapeurs du matin et l'air pur du soir, que j'aurais cru copiée dans un bon auteur, si je ne l'avais vu écrire. Par malheur la calligraphie et l'orthographe sont ce que je vous ai dit, mais qu'importe! C'est une affaire de quelques mois de leçons, tandis que toutes les leçons de monde ne lui apprendraient pas à écrire, si elle n'avait pas reçu le don de voir et de sentir, et aussi de rendre ce qu'elle voit, et ce qu'elle sent. (*EF*, p. 234）
私は、マロクールについて、ペリーヌに作文させました。20 行でも、100 行でもいいので、この地方はどんな地方か、そして彼女はどう思うのかを書くように。彼女は一時間もしないうちに、ペンを走らせ、言葉を探すこともなく、大きな紙 4 頁もの、本当におどろくべき文章を書いたのです。そこには村そのものも、工場も、一帯の風景も、細かな点も全体も、凡てが書かれていました。泥炭掘についての一ページなど、植物、鳥、魚や、朝もやに包まれる眺め、夜の澄んだ空気まで、もし彼女が文を書いているところを見なかったら、立派な作家の文章を写したのだと思ったでしょう。残念ながら、字と綴り字は、申し上げた通りです。しかしそれが何だと言うのでしょう！そんなものは数か月のレッスンで済むことです。しかしそれに対して、あのように見て、感じる能力、そして見たもの、感じたことを表現する能力は、生まれつき備わっていなければ、どんなレッスンでも習得させることはできないでしょう。（拙訳）

本に此の子が教育を受けなかつたら大変で御座いましたね、此の位利巧なのは御座いません、宮古と云ふ題を出して作文を作らして見ましたら、此の村の大体の事、くはしい事、それから沼に居る動物や植物や、くはしく観察して書きました、其の手際は大家の文章を見る様です、もう三四ヶ月も経ちましたら、如何に立派になるでせう。(『雛燕』、235 頁。）

原典では、主人公が泥炭堀やマロクールで生き抜く中で培った「見て、感じる能力、そして見たもの、感じたことを表現する能力」が絶賛される。しかし、翻訳では、「その手際は大家の文章を見る様です、もう三四か月も経ちましたら如何に立派になるでしょう」と、文章の上手さを主に賞賛し、重要な点を欠いた、曖昧な訳となっている。さらに、原典で上の引用に引き続き書かれる、次の文章は、翻訳では削除された。

Ne trouvez-vous pas, dit-elle enfin, que savoir créer ce qui est nécessaire à ses besoins est une qualité maîtresse, enviable entre toutes? (*EF*, p. 234）
自分にとって必要なものを作り出せる能力というのは、何よりも重要で、何よりもうらやむべき能力であるとは思われませんか？(拙訳)

Je n'estime rien tant dans la vie que la volonté à qui je dois d'être ce que je suis. C'est pourquoi je vous demande de la fortifier chez elle [=Perrine] par vos leçons, car si l'on dit,

avec raison qu'on peut ce qu'on veut, au moins est-ce à condition de savoir vouloir, ce qui n'est pas donné à tout le monde, et ce qu'on devrait bien commencer par enseigner, si toutefois il est des méthodes pour cela ; mais en fait d'instruction, on ne s'occupe que de l'esprit, comme si le caractère ne devait point passer avant. (*EF*, p. 234-235）
私は人生で意志ほど大切なものはないと思っている。今の私があるのは、意志の力のおかげだ。だから、私はあなたに、あなたのレッスンによって彼女の内面に意志を鍛えてほしいと思っているのです。というのも、やろうと思えば何でもできると言われるのが正しいとしても、それは少なくとも何をしたいか分かっていなければならないし、そういったことが全員にもともと備わっているわけではないので、教育から始めなくてはならない。そのための教育方法があったらですがね。しかし実際の教育では、知力しか問題にせず、まるで人格が知力よりも優先されてはいけないかのようだ。(拙訳)

一つ目の引用内の「自分にとって必要なものを作り出せる能力というのは何よりも重要で、何よりもうらやむべき能力ではないでしょうか」という主人公の家庭教師の言葉、二つ目の引用内の「人生で意志ほど大切なものはない」「彼女の内面に意志を鍛えてほしい」という、主人公の祖父の言葉、つまり、マロがこの小説で描きたかった「意志の研究」に関する記述は、訳出さえされなかった。これらの省略が、あらすじには関係ないと考えられたためになされた可能性も否定できない。しかし、本稿ですでに見た、原典から翻訳への章構成の改変、五来の女性観を併せて考えると、主人公の少女の自立性が弱まる様に翻訳されたのではないかとも考えられる。五来は『雛燕』の結末を次のように独自の文言で締めくくる。

此様にして旅先きで産み落され、旅先きで親鳥に死なれ、森から森、軒から軒とさまよひ行いた雛燕は、とうとう本巣に帰つて、目出度く懐しいお祖父様に逢ふことが出来たのである。是から先きは、今まで難儀をした中、種々世話になつた人達を親切にして世をうれしく暮した。否親切にして呉れなかつた人達までも、皆それぞれ世話をしてやつて、幸福に世を送つたと云ふことである。めでたしめでたし。（『雛燕』、278 頁。）

原典の結末では、主人公が成し遂げた労働環境の改善の結果を祖父と視察した後、主人公がいつか結婚し、紡績企業が主人公の人生とともに益々発展していくという希望が示唆される。しかし、『雛燕』には、企業の発展に関する記述はなく、主人公の幸せは「懐しいお祖父様に逢ふことが出来た」ことに帰され、「雛燕」というタイトルもこの結末に由来することが判明する。社会的な成功と家族との再会の両方が主人公の幸福であることが明示される原典に対し、翻訳ではただ、家族との再会のみに、それが帰されてしまっている。

7　まとめ

主人公が意志の力で困難を乗り越え、自立的な女性へと成長を遂げる *En famille* という小説は、『新少女』という進歩的な少女雑誌で紹介され、読者に人気を博した。この小説が雑誌の編集方針にも合致した可能性も高く、少女が母と死別して孤児になり、一人で旅をし、紡績企業で働きながら、様々な困難を乗り越え、祖父との再会を果たすというあらすじは尊重して翻訳された。しかしながら、実際の『雛燕』の翻訳の様相を見ると、少女の一人旅は汽車の旅となり、「ロビンソナード」は省略され、主人公の自立性を表す表現、「意志の研究」という原典の主題に関わる文言は曖昧になり、削除された。そして結末において主人公の幸福は、祖父との家族としての再会にだけ帰された。五来は *En famille* の物語の重点が、孤児の少女の実の家族との再会にあるように翻案した。その結果、マロが重点を置いて執筆した「意志の力による絶え間ない努力以外に何の支えもな」い少女がいかに生き抜いたのか、という側面は弱められた。保守的な女性観を持つ五来が、主人公の過酷な試練、自発的な行動や意志の表現に制限を加えるように翻訳したとも考えられるのである。

本稿では、紙幅の関係もあり、とくに原典と翻訳の本文の比較について、原典における女子教育観に関わる記述を中心に論じ、他の個所が十分に論じられなかった。別稿に譲りたい。

※本稿は、科学研究費補助金（若手研究）「明治後期から大正初期の少女雑誌におけるフランス文学・フランス文化の受容」（課題番号 21K12971、令和 3 年度～5 年度）の研究成果をまとめた一部である。

執筆者紹介（掲載順）

田中智行（TANAKA, Tomoyuki）
人文学研究科言語文化学専攻　表象文化論講座　准教授
中直一（NAKA, Naoichi）
名誉教授
三浦あゆみ（MIURA, Ayumi）
東京大学大学院総合文化研究科　准教授
渡辺貴規子（WATANABE, Kimiko）
人文学研究科言語文化学専攻　表象文化論講座　准教授

（2023 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2022

言語文化の比較と交流 10

2023 年　5 月 31 日　発行

編集発行者
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻